2017年度 カンボジア 現地活動報告書

2018年 2月7日～28日

プノンペン州、シェムリアップ州、コンポントム州

4年生　市川舞夏、大久保佳織、大塚桃香、村瀬朱里

2年生　安部和佳奈、小川龍星、小田嶋優花、谷内うらら

1年生　岩上颯太、川畑美由紀、小泉栞莉、佐藤透、高橋くるみ、
田村遥花、 丸山海結、渡部陸

目次

目次 2
PART 1 はじめに 4
団体紹介 5
Plas+のこれまで 6
お世話になった方々 7
カンボジア基礎情報 10
トム・オー村（活動先）基礎情報 11
トム・オー小学校が抱える問題 14
プロジェクト概要 15
プロジェクトのこれまで 16
塀の建設費用と内訳 18
塀建設における資金集め 19
PART 2 トム・オー村 26
現地スケジュール 27
塀完成セレモニー 28
交通安全に関する出前授業 38
全校運動会 43
PART 3 シェムリアップ・プノンペン 48
くっくま孤児院 49

目次

かものはしプロジェクト 50
アンコールワット 51
カンボジアサーカス・ファー.....52
アプサラダンス 53
ベンメリア遺跡 54
トンレサップ湖 55
タヤマビジネススクール 56
トゥールスレン博物館.....57
キリングフィールド.....58
日本・カンボジア絆フェスティバル 59
フットマーク株式会社工場 60
ロン島 61
PART 4 メンバーの感想 63
4年生 64
2年生 79
1年生 89
PART 5 おわりに.....106
今後の課題 107
おわりに.....109

PART 1 はじめに

まず、2018年2月の渡航に先立って、Plas+の設立の経緯や、カンボジアの基本情報、プロジェクトの概要、そのための国内での活動などについてご紹介させて頂きます。

団体紹介

私たちは、麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力（IEC）専攻の、4年生4名、2年生4名、1年生8名、合計16名で活動している国際協力団体Plas+です。「プラス」と読んでください。

Plas+とは”Present love to all students”の略で、”すべての子どもたちに愛を”、をモットーに活動を行っています。映画『僕たちは世界を変えることができない[1]』に感化され、「私たちもカンボジアで何かしたい！」と考え、2014年4月26日に団体を発足しました。

現在は、一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）[2]が、小学校建設の際に資金援助したトム・オー小学校を拠点とし、様々な活動を展開しています。また去年から新たにフィリピンを渡航先に加え、カンボジア、フィリピン、日本の3か国で国際交流・国際協力を行っています。

---

[1] 『僕たちは世界を変えることが出来ない but we wanna build a school in Cambodia』
葉田甲太さんの体験記が原作となった、向井理さん主演のノンフィクション映画。ひょんなことをきっかけに、医大生4人がカンボジアの子どもたちのために学校を建設しようと奮闘する青春ストーリー。Plas+では、新メンバーが入ると、まずこの映画を一緒に観ることにしている。

[2] 一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）
発展途上国において文化、経済の発展に協力するため国際協力活動を通じて、世界の平和、人類の安心と幸福増進に寄与することを目的とし、主にネパール、タイ、ラオス、カンボジアにおいて援助活動を行っている。

PLAS+のこれまで

結成1年目は、カンボジアや国際協力について学習を始め、私たちにできることを探しに初めて現地を訪れました。しかし、カンボジアの実情と国際協力の難しさを痛感し、現実に打ちのめされてしまいました。

それでも私たちにできることを探すために、2年目からは自主企画ゼミナール[3]としてPlas＋の活動を申請し、大学にも認知される団体となりました。そして担当教員である麗澤大学外国語学部講師（当時）の内尾太一先生と共に、インタビューリレーをという活動を始めました。

インタビューリレーとは、カンボジアに詳しい専門家やゆかりある方を訪れ、これまでのご経験についてお話を聴かせて頂き、その方に次のインタビュー協力者の紹介をお願いする、というものです。

インタビュー協力者のカンボジアにまつわるエピソードやカンボジアでの国際協力についてお聴きするとともに、これまで20名近くの専門家に「学生の私たちにできることは何か」という共通質問をして、様々な意見やアドバイスを頂きました。それらのアドバイスを基に私たちが考案したものが出前授業[4]でした。

---

[3] 自主企画ゼミナール
麗澤大学が開講している授業形態の１つで、既存の枠組みにとらわれず、より多く学びたいという意欲的な学生、並びに主体的に学習計画・学習内容を提案したい学生のための科目。授業としての扱いとなるため、単位認定もされる。

[4] 出前授業
メンバーが担当教科を持ち、先生となって授業を展開するというもの。これまでカンボジアでは小学校3校で6教科（科学、言語、体育、交通安全、夢、日本文化）の出前授業を行った。国内では南三陸町の塾や都内の高校でカンボジアの良さを広める出前授業を行った。

これまでカンボジアには、団体として公式に7度訪れており、その度に出前授業を行い、国内でもカンボジアの良さを伝える出前授業を展開しています。

また、昨年から活動拠点をフィリピンにも拡大し、課題解決型のプロジェクト形成を開始しました。昨年の夏季休暇に3名のメンバーが、セブ島に訪れ、現地の状況を調査し、2018年度から本格的な活動を計画しています。

お世話になった方々

【日本】

- 木下廣太郎さん：トム・オー小学校建設・塀完成セレモニー出席〈一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA） 常務理事〉
- 小西直之さん：塀完成セレモニー出席〈RODA 理事〉
- 俣野幸昭さん：塀完成セレモニー出席〈RODA 監事〉
- 林真市さん：航空券手配〈株式会社林旅製作所[5]〉
- 太田祥歌さん：クラウドファンディング伝授〈認定NPO法人日本ハビタッ

[5] 株式会社林製作所
航空券の手配やスタディーツアーの計画を手掛けている会社で、お客様が旅行をし、その国をサポートする「旅のフェアトレード」を行っている。航空券を申し込むと一人につき500円　を、また、スタディーツアーの申し込みをすると売り上げの一部を旅した国に寄付している。

お世話になった方々

ト協会[6]〉

【カンボジア】

- ソパートさん、アチョーさん：ガイド・通訳
- ソクさん、チャンさん：ドライバー
- ヌン・ジャンさん：トム・オー村 村長（以下、村長）
- アムヒイアンさん：トム・オー村 副村長（以下、副村長）
- シースンさん：トム・リン市 市長（以下、市長）
- ホンさん：トム・リン市 副市長（以下、副市長）
- リウティナさん：トム・オー小学校 校長（以下、校長先生）
- ハイロンワィさん、スンリーさん、ボッコントルさん、ティーボンチャンさん、シェンサンボーさん：トム・オー小学校 教員（以下、先生方）
- ヴィスナーさん、ドラーさん、リーさん、ポルさん、メーさん、サイさん：塀建設（以下、建設業者の方々）
- 酒井恵理子さん：くっくま孤児院訪問の受け入れ〈NPO法人グローブジャ

[6] 認定NPO法人日本ハビタット協会
人間居住問題の重要性に関する広報活動や、居住分野における国際協力活動、人間居住環境の改善活動を主に行っているNPO団体。世界中の人々がより良い暮らしができ、安心して安全に暮らすことができるようなまちづくりの推進に寄与することを目的としている。

ングル[7]〉

* 池田基樹さん：工場見学の受け入れ〈フットマーク株式会社[8]〉

その他にも今回の渡航にあたり、多くの方々にご協力いただきました。
この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

本当に、どうもありがとうございました。

[7] NPO法人グローブジャングル
カンボジアで子どもたちの未来を創るサポートをしている団体。主に、孤児院支援や学校建設、貧困家族への就労支援を行っている。

[8] フットマーク株式会社
創業72年（2018年現在）東京都に本社を構える水泳用品、介護用品、健康インナーのメーカー。奈良、韓国、中国、台湾、ベトナム、カンボジアに工場を展開している。

カンボジア基礎情報

【カンボジア王国の基本情報】

首都：プノンペン

人口：1567.7万人

面積：18.1万㎢

一人当たりの国内総所得：950米ドル

公用語：カンボジア語（クメール語）

主要産業：農業・縫製業・建設業・観光業

【近代以降の略史】

1863年 フランスの保護国となる。

1887年 フランス領インドシナに編入される。

1945年 カンボジア王国として独立を宣言する。

1947年 フランス連合内で限定独立を遂げる。

1953年 完全独立を獲得する。

1970年 親米のロン＝ノル将軍が実権を掌握する。共和制へ移行したが、内戦が始まる。

1975年 クメール＝ルージュがプノンペンを陥落させ、実権を掌握し、民主カンボジア政権（ポル＝ポト政権）が樹立する。この間、

大量虐殺が実行される。

1979年 ベトナム軍の支援で救国民族統一戦線がプノンペンを攻略し、カンプチア人民共和国（ヘン＝サムリン政権）を樹立する。

1982年 ロン＝ノルのクーデターで追放されていた元国家元首シアヌークらが民主カンボジア連合政府を樹立し、内戦が激化する。

1989年 ベトナム軍が完全撤退する。

1993年 王政が復活し、現在まで続くカンボジア王国が誕生する。

【参考】

二宮書店編集部（2016）「カンボジア王国」『データブック・オブ・ザ・ワールド 2016年度版』pp.186～188、二宮書店。

トム・オー村（活動先）基礎情報

【村の基本情報】

名称：トム・オー村

住所：コンポントム州サンダン群トムリン市トム・オー村

人口：1,493人（0～18歳 286人・18歳以上 1,207人）※2015年データ

広さ：約2km（縦距離）

トム・オー村（活動先）基礎情報

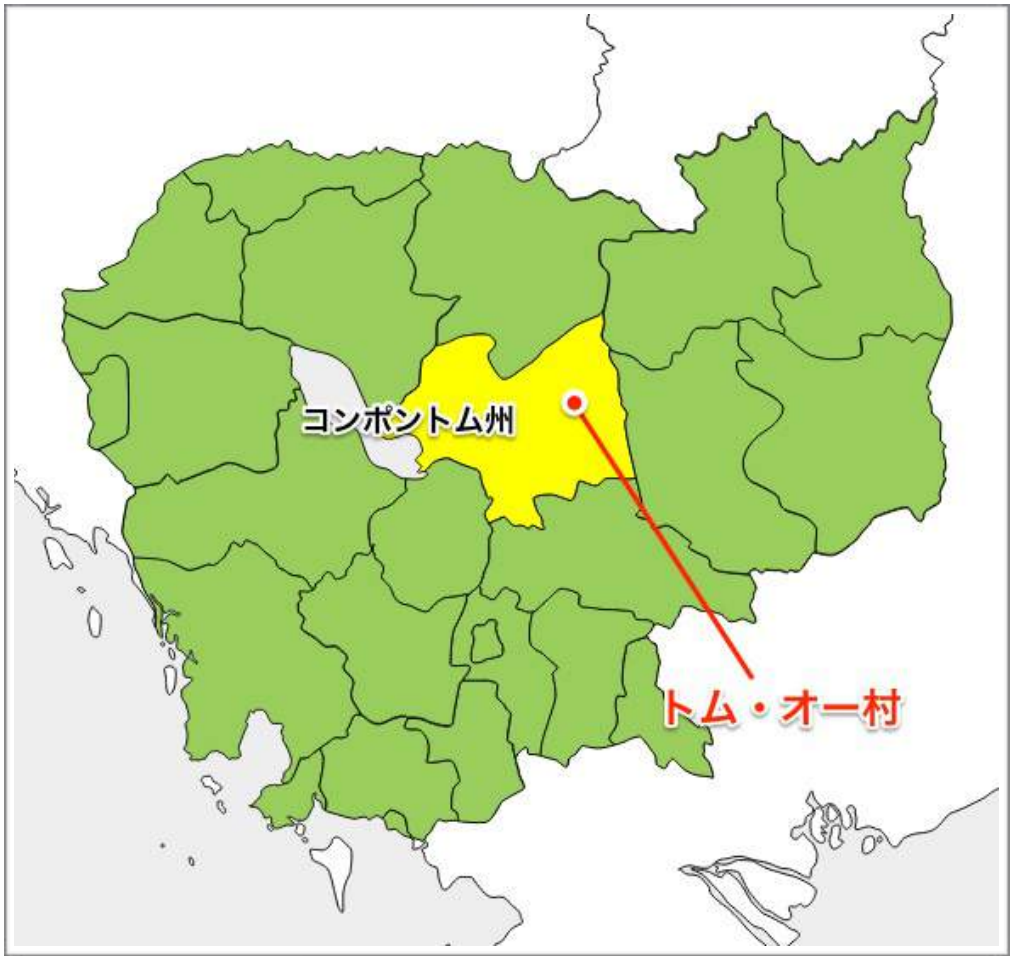
村長：ヌン・ジャンさん(65歳) ※2003年より就任

- ✳ 仕事内容：村全体の統括
- ✳ 選抜方法：村選挙（次回は未定）
- ✳ 家系：村長の親戚は政府関係者

職業：基本は農業と商業

主要作物・商品：キャッサバ、胡椒、米、カシューナッツ、ゴム

※カシューナッツとゴムは輸出されている。



【小学校の基礎情報】

名称：公立トム・オー小学校

生徒：179人（前年度より+6人）※2017年12月データより

校長：リウティナ先生（29）

教員：6名（男性）ハイロンワィ先生、スンリー先生、ボッコントル先生、
ティーボンチャン先生、シェンサンボー先生

主要科目：数学、国語、理科、社会、体育、英語（4~6年生）

管轄：カンボジア政府

広さ：1ha（10,000㎡）

トム・オー小学校が抱える問題

2016年の2月に行った現地調査によって、トム・オー小学校の校庭は、村人の近道として利用されていることが確認された。また、**バイクや耕運機が校庭内に度々侵入しているため、子どもたちが衝突の危険性に晒されていることが明らかになった**。

もし、深刻な事故が起これば、子どもの身体に障碍が残るかもしれないし、最悪の場合、命に関わるかもしれない。この現状は村長をはじめ、校長先生や小学校の先生方が大変心配していることであった。

トム・オー小学校に通う子どもたちの命を守ると同時に安全な環境で学び、遊んで欲しいという願いから、私たちは『**トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト**』を考案した。

再度行なった同年11月の現地調査の際には、より深い調査を目指し小学校周辺の視察を行なった。村長や校長先生、小学校の先生方と話し合った結果、この問題を解決する為に小学校の四方を囲う頑丈な塀を建設することになった。安全な環境を確保することにより、先生方の懸念は解消され、保護者も安心して子どもを学校に通わせることができる。

小学校で行われている私たちの出前授業や運動会での安全性の向上とともにトム・オー小学校での教育がより活発になることを期待し、プロジェクトは進められた。

プロジェクト概要

名称：トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト

問題：校庭内へのバイク等の侵入により、子どもたちが事故に巻き込まれる恐れがある。

原因：近隣住民が近道として、校庭内を通り抜けることが、村の日常となってしまっている。

現状：5分間に4～5台のバイクが校庭内を横切る。

過去に行われた対策：呼びかけ、簡易的な柵で道を塞ぐ（しかし、すぐに壊されてしまったという）。

Plas+の計画：

① 短期：「飛び出し坊や」を設置し、交通安全を注意喚起する。

② 中期：交通安全に特化した出前授業を続け、危機意識を共有する。

③ 長期：村の人々とともに、小学校の四方を頑丈な塀を築き、バイク等の侵入を防ぐ。

プロジェクトのこれまで

☑ 2016年度 現地調査① （2015年2月）

・初めての訪問。

・日本文化、夢に関する出前授業の実施。

・校長先生から“塀を建設してほしい”というニーズを聞く。

☑ 2016年度 現地調査② （2016年11月）

・村長と校長先生を交え、ニーズの再調査と現状についての話し合い。

・「飛び出し坊や」設置の相談。

☑ 2016年度 プロジェクト実施 （2017年2月）

・交通安全に関する出前授業「命を守る右、左」の実施。

・「飛び出し坊や」の設置。（2体）

・村人向け相談会の実施。(ここで村人からの了承を得る)

・先生方とプロジェクトの計画についての話し合い。

・塀建設を委託する業者の方々との話し合い。

☐ ここまでの内容は、Plas+公式ホームページ（下記リンク）より、ダウンロード頂けます。

『2016年度カンボジア現地活動報告書』 https://rtk-plas.jimdo.com/document/

☑ 2017年度 現地調査① （2017年11月）

・建設業者の方々、先生方と現地視察。

・建設業者と契約の締結。

・トム・リン市長へのご挨拶。

☆ **2017年12月上旬 トム・オー小学校の塀建設工事 着工。**

☑ 2017年度 現地調査② （2017年12月）

・工事の進行状況の確認。

・トム・リン市長、副市長と塀完成セレモニーの打ち合わせ。

☆ **2018年1月下旬 トム・オー小学校の塀建設工事 終了。完成！**

☑ 2017年度 プロジェクト実施 （2018年2月）

・交通安全に関する出前授業「命を守る幸運のお守り」の実施。

・アームリフレクターの配布。

・塀完成セレモニーへの参加。

塀の建設費用と内訳

⑴ 柵 572本 × $7.75 = $4,318.6

⑵ セメント 114㎥ × $7 = $798

⑶ 砂 73㎥ × $12 = $876

⑷ 石 65㎥ × $25 = $1,625

⑸ レンガ 15,000個 × R500 = $1,875

※R=カンボジア通貨“リエル” R2,000 = $0.5

⑹ 針金 3kg × 400m × $1.5 = $1,800

⑺ 運搬費 $700

⑻ 人件費 $3,000

合計 $14,992.6

＝日本円で約170万円

塀建設における資金集め

ここでは、Plas＋が行った主な資金集め[9]について、以下の5つの方法を紹介していきたい。

① 物品販売

② クラウドファンディング

③ 企業協賛

④ 募金活動

⑤ 政策提言コンテスト

① 物品販売（募金活動）

毎年6月、廣池学園内で2日間にかけて行われる伝統の日「感謝の集い」で、普段からお世話になっているRODAの木下さんのお声かけで、初めての物品販売を行った。出店したブースに置いた商品は、私たちがカンボジアへ渡航した際にひとつひとつ選んで仕入れたものである。

このブースで扱った商品は以下の通りである。

9 塀建設の資金集めを開始する前に、RODAから20万円の活動補助金を受けた。この資金は、塀建設のために全て充てられた。

塀建設における資金集め

《販売品》

・カンボジアスカーフ（価格 1,800円）

・手書きの絵画（価格 小2,300円、中3,400円、大6,000円）

《募金活動》

　1,000円以上の募金をしてくれた方々には、Plas+が建設する塀に名前を刻む約束をした。

[伝統の日で集まった金額]　**233,885円**

　初めての物品販売だったため、どのようなものに需要があるのか、正直、全く分からない状態であった。ブースで足を止めた方々の多くは、品物以上に、私たちの活動やトム・オー小学校の現状に興味を持ってくださったようだ。実際、塀建設の意義に共感して頂き、たくさんの募金協力を得ることもできた。

② クラウドファンディング

画像：Ready for 専用ページより https://readyfor.jp/projects/13671

クラウドファンディングは、プロジェクト実現のために目標額を設定して、インターネットを通じて不特定多数の人から、資金を集める方法である。クラウドファンディングには、大きく分けて、「All In型」と「All or Nothing型」がある。「All In型」は、目標額を達成していなくても、期間内に集まった分の金額を獲得できる。一方、「All or Nothing型」は、定められた期間に目標額を達成できなければ、1円も入ってこない。

インターネットを通じてお金を集めることは、もちろん今回が初めてのことだったため、日本ハビタット協会の太田さんから、クラウドファンディングの特別講義を受けた。

そして、私たちはあえて「All or Nothing型」を選んだ。0か100かの挑戦が自分たちをより奮い立たすことができると思ったからだ。目標額は、750,000円だ。

2017年9月15日から10月31日の48日間という短い期間であったが、た

くさんの方々のご協力のおかげで、締め切り3日前に目標を越え、終了日には778,000円を集めることができた。達成額の20%は、今回活用したクラウドファンディング・サイトReadyforへの手数料となる。結果として、私たちは塀建設費用全体の3分の1以上、約63万円を獲得することができた。

[クラウドファンディングで集まったお金]　**635,160円**

　クラウドファンディングを行って、たくさんの方の寄付はもちろんのこと応援のメッセージも頂き、何度も励まされた。そして、このプロジェクトが、私たちとトム・オー小学校の子どもたちだけのものではないのだ、と再度確認するきっかけとなった。
　クラウドファンディングの効果はそれだけではない。Plas+の学内での認知度アップにも貢献した。今まで直接関わりのなかった大学の教職員の方々にもプロジェクトのことを知ってもらえるようになり、「塀建設頑張ってね」と声をかけて頂く機会も増えた。
　最初この挑戦は、無謀にも思えた。それを成功させられたことは、私たちの「塀建設を必ず実現できる！」という自信にも繋がった。

③ 企業協賛

　個人でできる資金調達の方法として、インターネットの協賛サイト（ガクセイ協賛.com）に登録し、積極的に取り組んだ。勉学や課外活動、Plas+の活動もあったが、それぞれ時間を見つけて行った。Plas＋が主に行った企業協賛は以下の3つであった。

・無料ゲームアプリをダウンロードし報酬を得る協賛[10]。
（この協賛で得た報酬：71,600円）
・家庭教師サイトに登録し報酬を得る協賛。
（この協賛で得た報酬：15,000円）
・就職活動イベントへの参加し報酬を得る協賛。
（この協賛で得た報酬：7000円）

[協賛で集まった金額] **92,800円**（差額800円は手数料）

④ 募金活動

主な資金集めのひとつでもある募金活動にも取り組んだ。

・JR柏駅前で街頭募金
・麗澤大学内で学内募金
・団体内で行うPlas+募金

2018年2月の渡航直前まで、この募金活動を行った。そのラストスパートでは、とにかく全力で大きな声を出して、私たちの想いを、通りかかる人々に届けた。すると、たくさんの方が、活動に関心を持って、足を止めてくれた。そして、「頑張ってください」と温かい声をかけてくださった。

[10] 無料アプリダウンロード
指定されたゲームアプリをダウンロードし、その証拠としてスクリーンショットを送るだけで報酬がもらえる仕組みだ。1～20アプリダウンロードまでが1アプリにつき100円、21～30アプリダウンロードが1アプリ200円という仕組みになっており、最大で6,000円もらえる。

他にも、風邪をひかないように、とカイロをくれた方や、自分のお小遣いから募金をしてくれた小さい子もいた。この募金活動を通して、人の優しさを直に感じることができた。そのことは、私たちが現地で頑張る力の源となった。

また、私たちは毎週ゼミの後にメンバー内でPlas+内募金を行った。その目的は、1円でも多く集めるというだけではない。

頂いたご支援だけに頼るのではなく、自分たちが絶対に塀を建てるのだ、という自覚を強くもつためであった。そのため、夏休みにはアルバイトをした収入で、メンバー内で募金をした。メンバーそれぞれが本気でプロジェクトに臨んでいることを知ることができ、更なるモチベーションの向上にもなった。

[募金活動で集まった金額] **431,718円**

⑤ 政策提言コンテスト

麗澤大学には、「プロジェクト・プラス」というプレゼンテーション大会がある。審査委員と観客向けに、実際に行っていくことを前提としたプロジェクトを提案し、発表と計画の完成度を競うというものである。Plas+は過去に2度参加し、塀建設に必要な資金を集めるために奮闘した。

結果は、2年連続の2位であった。この順位に、メンバー全員が心から悔しい思いをした。しかし、それは同時に、プロジェクト成功にかける想いを、一層強くすることにもつながった。

［政策提言コンテストで集まった金額］**100,000円**

以上、

⓪ RODAからの活動補助金（昨年度より）	200,000円
① 物品販売	233,885円
② クラウドファンディング	635,160円
③ 企業協賛	92,800円
④ 募金活動	431,718円
⑤ 政策提言コンテスト	100,000円

合計：1,693,563円

皆さまのご協力に、心より御礼申し上げます。

PART 2 トム・オー村

いよいよ、2018年2月のトム・オー村での活動をご報告します。

現地では塀の完成セレモニーに出席し、子どもたちと一緒に出前授業と全校運動会に取り組みました。そのときの熱気を、ここで少しでもお伝えできたら嬉しいです。

現地スケジュール

	2/7(水)	2/8(木)	2/9(金)	2/10(土)	2/11(日)	2/12(月)	2/13(火)
滞在場所	日本～カンボジア移動	プノンペン①	プノンペン②	プノンペン③	シェムリアップ	トム・オー村①	トム・オー村②
6:00			自由行動	自由行動	シェムリアップ着 *6:30		
7:00	集合（A：大塚、市川）		In プノンペン	In プノンペン			
8:00	集合（B：その他メンバー）						
9:00	成田発（A）						運動会
10:00	成田発（B）*10:50					アルンラス発	
11:00							
12:00					ソバートさん合流		
13:00	香港乗り換え（A）*13:25					トム・オー村着	
14:00					シェムリアップ着（小川）		前日準備
15:00	プノンペン着（B）*15:40	くっくま孤児院訪問			シェムリアップ発	堀完成セレモニー	
16:00						関係者MTG	
17:00	プノンペン着（A）*17:45						
18:00		ラトキヨさん食事			コンポントム着		上映会 *18:30
19:00							
20:00							
21:00							
22:00							
23:00				夜行バス*23:30			
0:00							

	2/14(水)	2/15(木)	2/16(金)	2/17(土)	2/18(日)	2/19(月)	2/20(火)
滞在場所	トム・オー村③	トム・オー村④	シェムリアップ①	シェムリアップ②	シェムリアップ③	シェムリアップ④	プノンペン①
6:00			自由行動				プノンペン着
7:00			In シェムリアップ				
8:00						小川帰国 *8:35	
9:00	堀完成セレモニー 開始	交通安全出前授業					
10:00							
11:00					ベンメリア 観光		
12:00	堀完成セレモニー 終了	トム・オー村発					
13:00				アンコールワット 観光			
14:00							
15:00	1・2年メンバーMTG				トンレサップ湖 観光		
16:00							
17:00	出前授業 夕方練習	シェムリアップ着 17:30		サーカス 鑑賞			
18:00				伝統舞踊 鑑賞 *17:30			
19:00				レストラン			
20:00							
21:00	出前授業 夜練習						
22:00							
23:00						夜行バス発 *23:30	
0:00							

	2/21(水)	2/22(木)	2/23(金)	2/24(土)	2/25(日)	2/26(月)	2/27(火)
滞在場所	プノンペン②	プノンペン③	ロン島①	ロン島②	ロン島③	プノンペン①	プノンペン②
6:00			プノンペン出発 *6:20				
7:00							
8:00							
9:00							
10:00	タヤマ日本語学校 訪問	キリングフィールド 観光				フットマーク社工場見学	
11:00							
12:00							
13:00	トゥールスレン収容所 訪問				ロン島出発		
14:00							
15:00							
16:00			ロン島到着				
17:00							
18:00		KIZUNAフェス前夜祭参加					
19:00							
20:00							空港着 *20:30
21:00							
22:00	川畑帰国				プノンペン到着		プノンペン発 *22:50
23:00							
0:00							帰国 *翌朝 6:30

塀完成セレモニー

【塀完成セレモニーに向けてのミーティング】

日時：2月12日（月）15:00～16:00

私たちは2月12日月曜日にトム・オー村に到着した。到着してすぐに市長や副市長、事務代表の方と顔合わせをし、塀完成セレモニーに向けてミーティングを行った。当日までの流れや今後の話などを中心に双方で確認した。そこで決まったスケジュールは以下の通りである。

〈スケジュール〉

① 開会宣言
② 来賓紹介
③ サンダン郡長挨拶
④ 国歌斉唱（カンボジア、日本）
⑤ Plas＋から歌のプレゼント
⑥ トム・リン市長挨拶
⑦ Plas＋結成メンバー挨拶
⑧ RODAの木下さん挨拶
⑨ RODAから文房具の贈呈
⑩ 感謝状とクロマー（カンボジアスカーフ）の贈呈
⑪ リボンカット
⑫ 植樹
⑬ 昼食
⑭ ダンスタイム

【塀完成セレモニーに向けての準備】

日時：2月13日（火）13：00～19：00

この日は午前中に出前授業の1つである運動会を開催した。

そして、昼食をとった後は、塀完成セレモニーに向けての準備を行った。椅子の準備やごみ拾い、塀のレンガのペンキ塗りなど、会場設営は、トム・オー小学校の子どもたちや先生も参加し、皆で協力して作業を進めることができた。

ここで余談だが、ペンキを塗っている最中に塀の柱に何か書いてあることに気が付いた。よく見てみるとPlas＋全員の名前が刻んであったのだ。これは、ソパートさんの計らいだったという。

心の温まるサプライズにメンバー全員が感動した。

塀完成セレモニー

【塀完成セレモニー前夜祭】

日時：2月13日（火） 19：30～21：00

ソパートさんのご厚意で、プロジェクターをお借りし、塀完成セレモニーの前夜祭として、校庭内で映画鑑賞会を行った。子どもたちだけではなく、村の若者や大人など、老若男女問わず人が集まった。

【塀完成セレモニー】

日時：2月14日（水） 9:00～12:00

いよいよ塀完成セレモニー当日。『トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト』の集大成を示す日である。

かつてトム・オー小学校の建設に資金援助を行い、Plas+の善き理解者、支援者でもあるRODAの関係者の方々にもご参加頂いた。午前9時前に、RODAの木下さん、小西さん、俣野さんがトム・オー小学校に到着した。

RODAの方々が到着したところで、セレモニーは、子どもたちがつくってくれた、正門から会場となるテントの下までの花道を通ることから始まった。

また、セレモニーは通訳を介して行われた。

① 開会宣言

カンボジアは仏教国であるためお坊さんへお供え物を手渡し、御経を唱えて頂いた。そして司会が開会宣言を行った。

② 来賓紹介

カンボジア側は郡長や市長などを紹介し、日本側はRODAの木下さん、小西さん、俣野さん、私達の簡単な紹介を行った。

③ サンダン郡長挨拶

郡長からは、今後の私たちPlas＋との関係の発展について、お話を頂いた。

④ 国歌斉唱（カンボジア、日本）

最初にカンボジアの国歌、次に日本の国歌を斉唱した。

⑤ Plas＋から歌のプレゼント

Plas＋からは日本の曲である高橋優さんの『福笑い』、スピッツの『チェリー』の2曲を披露した。ほとんどのメンバーが泣きながら歌っていた。『福笑い』の歌詞に、世界の共通言語は英語ではなく笑顔だ、という部分がある。ここが、私たちの今までの交流や活動の部分が重なり、メンバー全員がそれに共感したからだろう。塀完成セレモニーの参加者もカンボジア人なので歌詞の意味が分からないはずだが、涙を流している人もいた。言葉が伝わらなくても心が繋がっていることを実感した。

⑥ トム・リン市長挨拶

市長からはPlas＋への感謝の言葉とともに、郡長同様、今後の私たちPlas＋との関係の発展についてお話を頂いた。

⑦ Plas＋結成メンバー挨拶

市川、大塚、村瀬の3名は、結成当時の話や塀建設までの道のりなど20分以上にわたって話した。ここでもPlas＋メンバー全員が涙を流し、改めてメンバー間の絆を感じることができた。

⑧ RODAの木下さん挨拶

木下さんからは、RODAとトム・オー小学校の繋がりのきっかけ、カンボジアと日本の関わり合いなどについてお話を頂いた。

⑨ RODAから文房具の贈呈

RODAの方々からのご厚意で頂いた資金で、購入したノート、ペン、消しゴムを子どもたちにプレゼントした。

⑩ 感謝状とクロマー（カンボジアスカーフ）贈呈

郡長と市長から塀建設の感謝状とクロマーを授与された。感謝状は私たちPlas＋だけではなく、カウンターパートのソパートさん、ドライバーのソクさん、塀建設業者のビスナーさん、ドラ―さんにも用意されていた。クロマーは単に手渡しするのではなく、あげる側がもらう側の首にかけるというものだった。それがカンボジアの伝統のようだ。

塀完成セレモニー

⑪ リボンカット

正門前でリボンカットを行った。日本のように関係者が一列に並んで同時に切るものではなく、赤い長い布を1人ずつ小さく切っていくというものだった。そして布を切り終えた瞬間、盛大な拍手が鳴り響いた。

⑫ 植樹

塀完成を祝して、正門近くに、植物の苗を、郡長や市長、RODAの方々、私たちPlas＋で、協力して植樹を行った。

⑬ 昼食

トム・オー村のお母さんたちが作ってくれたカレーを、セレモニー参加者全員でいただいた。みんなで食べるカレーは美味しく、幸せな時間だった。

⑭ ダンスタイム

塀完成を記念して、音楽に合わせながら、子どもたちを含め全員でダンスを踊った。喜びを各々ダンスで表現し、無事に塀完成セレモニーを終えることができた。

【塀完成セレモニーを振り返って】

報告書の冒頭にもあるように、Plas＋は日本の映画『僕たちは世界を変えることができない』の影響で、結成された。その映画のワンシーンに、主人公たちが無事に小学校建設を終え、開校式に参加するシーンがある。Plas+の塀完成セレモニーでは、まさにそれと同じような光景が広がっていた。下級生のメンバーも「僕せかみたーい！」と大興奮だった。そしてこんなにも盛大なセレモニーができることはたくさんの方の応援、ご協力があったからこそだと実感した。私たちだけの力では絶対に塀建設を成功させることは不可能だった。多忙の中、トム・オー小学校に来て頂いたRODAの木下さん、小西さん、俣野さんにも心から感謝申し上げたい。

また、セレモニー中は感動と達成感の涙で溢れていた。

1年生はカンボジアに来ること自体初めてだったが、渡航前からトム・オー小学校の子どもたちを想って、日本で資金集め活動に励んでくれた。その努力が実ったことを、塀完成セレモニーを通して感じることができたに違いない。

塀完成セレモニー

2年生もPlas＋に入ってからすぐに活動に関わり、時には先輩、時には後輩の立場で大好きなカンボジアのために頑張ってくれていた。

そして、4年生は団体結成当初から抱いていた「ニーズに応えたい」という目標を達成できた。一生懸命行ったことが形になったことが、何よりも嬉しかった。

塀は無事に完成したが、トム・オー村の人々、小学校の子どもたちには、これからも塀の現状維持や、交通安全に気を付けながら生活を送ってほしい。また、塀建設を行うにあたって、たくさんの人の協力や応援があったことを、忘れないでいてくれたら嬉しい。そうすることで、子どもたちの安全は、より確かなものとなる。それが私たちの願いである。

【トム・オー小学校に建設された塀】

【建設された塀の特徴】

- 校庭内にバイクや耕運機が侵入するのを防ぐため、その全長は400メートルにわたります。
- 雨季の大雨から塀の破損を防ぐため、地中に土台が作られています。
- 子どもたちの安全のため、カンボジアの主流である有刺鉄線は使用せず、ネットを使用しています。
- 建設費用を寄付、募金してくださった方のお名前をプレートに掲示させていただいています。

当初の予定では、建設された塀のレンガ部分に建設費用を寄付、募金してくださった方のお名前を刻む予定でした。しかし、塀の耐久性やお名前は綺麗に保存したいという考えから、計画を変更し、プラスチック製のプレートにお名前を掲示させていただきました。

皆さま、

たくさんの温かなご支援、ご協力、

本当に、ありがとうございました。

交通安全に関する出前授業

【担当】村瀬、大久保、大塚、小川、小田嶋、谷内
岩上、川畑、小泉、佐藤、高橋、丸山

【目的】

✳ 飛び出し坊や[11]とアームリフレクター[12]を登場させた劇を行う。
✳ 子どもたちが、楽しみながら、交通安全への意識を高める。
✳ アームリフレクターを配付し、起こりうる危険から子どもたちを守る。

【授業の流れ】

① 前回の授業の振り返り
② 「命を守る幸運のお守り」上演
③ アームリフレクターの配付と交通安全の呼びかけ

---

[11] 飛び出し坊や
滋賀県発祥の、ドライバーに子どもの飛び出しを注意喚起するための交通看板である。安価でできる効果的な対策として、現在では全国各地で定着している。Plas+は、2016年10月に滋賀県の社会福祉協議会や、飛び出し坊やの発明者を直接訪ね、国際協力のための活用の許可を得た。2017年にトム・オー小学校で行なった出前授業では、子どもたちが危険だと指摘した学校の正面2ヵ所に、坊やを設置した。子どもたちから「シンチャン」「ソンハー」という名前をもらった2人の坊やは、現在も彼らを温かく見守っている。日本国内だけでなく、世界の十数か国に設置されている「飛び出し坊や」だが、カンボジアで設置されたのはこれが初めてである。

[12] アームリフレクター
夜間の交通安全や防犯に最適な反射板リストバンドである。暗闇では、車やバイクの運転手から歩行者のシルエットは思っているよりも視認しにくい。そのため、私たちは子どもたちを起こりうる交通事故から守るためにPlas＋オリジナルのアームリフレクターを作成した。

【準備した道具】

前回の授業風景の写真、劇で使用する背景、クメール語字幕、日本語字幕、小道具（フライパンや焼きそばや衣装）、アームリフレクター

【授業内容】（司会進行：大塚）

① 前回の授業の振り返り（担当：村瀬）

まずは、前回の授業の振り返りを行った。日々の小さな心掛けが自分の命を守ることを強調した、紙芝居を子どもたちと一緒に回想した。

子どもたちからは、紙芝居で登場した主人公の名前や、学校周辺に設置した「飛び出し坊や」の名前が挙がり、前回の授業内容を覚えていることを確認することができた。

② 「命を守る幸運のお守り」上演

（担当：大久保、小川、谷内、岩上、川畑、佐藤、高橋、丸山）

「命を守る幸運のお守り」と題し、アームリフレクターを用いた劇を行った。劇中でアームリフレクターの使い方や効果を解説し、交通安全の大切さを訴えた。子どもたちの印象に残りやすく、交通安全は大切なことで楽しい、と感じてもらえるように心掛けた。

また、前回の授業で行った紙芝居の続きのストーリーを考え、登場人物に「飛び出し坊や」を用いた。そうしたことで、子どもたちに親近感を持って最後まで話を聞いてもらえた。

前回と同様、劇中の登場人物のセリフは、クメール語で話し、字幕のクメール語も自分たちで書くことに挑戦した。

交通安全に関する出前授業

物語の概要：

去年の紙芝居で登場したソパートとスレイクォイが結婚し、子どもが生まれた。その子どものソクが主人公の物語。

ある日、ソクは夜道を歩いていると、酔っぱらいが運転するバイクと衝突事故を起こしてしまう。

幸い大事には至らなかったが、足をケガしてうずくまるソク。

すると、突然、可愛らしい少年「飛び出し坊や」のソンハー君がやってきて「はずしちゃダメだよ」とソクの腕にアームリフレクターをつける。そして、これが命を守る幸運のお守りであることを伝える。

③アームリフレクターの配付と交通安全の呼びかけ

（担当：大塚、小田嶋、小泉）

アームリフレクターを配付する前にもう一度、使い方や効果、使用上の注意を説明した。劇中にアームリフレクターを登場させたことで、子どもたちの関心は既に高まっていて、配布時の交通安全の呼びかけにも良い反応が窺えた。

交通安全に関する出前授業

【出前授業を振り返って】

今回の出前授業の目的は、前回同様、楽しみながら交通安全への理解を深めてもらうことであった。さらに、塀の完成を踏まえて、学校内は安全かもしれないが一歩外に出ると何が起こるか分からない、というメッセージをそこに込めた。結果的に、昨年以上の手応えを感じることができた。

劇中の登場人物のセリフは、メンバー内で割り振り、自らクメール語で発声をした。そして、拙い発音で伝わらなかった時の為に、子どもたち向けにクメール語の字幕も用意した。前回と比べ、字幕を見る回数が減り、たくさんの笑顔と、大きなリアクションを得ることができた。子どもたちに会うたびに言葉の壁を感じ、クメール語の習得を課題としているが、今回はその成果が少しだけ見えた気がする。

今回の渡航で、最終目標に掲げた塀が完成したことで、『トム・オー村における安全な学び場づくりプロジェクト』は、一旦終了となる。トム・オー小学校の子どもたちにはこれからも交通安全を心掛け、安全な学び場で安全にすくすくと育っていってくれることを、私たちは期待している。

しかし、そのためには、プロジェクトのフォローアップも必要だろう。来年度以降は、塀の効果の確認を行いながら、引き続き、交通安全を呼びかける取り組みを考案していく。

年に何度も現地を訪れることができない分、1回1回、子どもたちの記憶に残るような出前授業を目指していきたい。

全校運動会

【担当】市川、安部、田村、渡部

【目的】

✳ Plas+のメンバーと子どもたち、現地の方々との親睦を深める。
✳ 勝敗をつけることにより、喜びや悔しさ、仲間と協力することの素晴らしさを体験する機会を共有する。
✳ ルールを定め、それを守ることで安全に、公平に、楽しく競技できることを伝える。
✳ 子どもたちにとって、最高に楽しい時間をプレゼントする。

【チーム構成】

できる限り力のバランスを平等にするために各学年を均等に分ける。
トム・オー小全校生徒合計：179人

青チーム：村瀬・田村
緑チーム：小川・小泉
白チーム：小田嶋・渡部・佐藤
オレンジチーム：谷内・丸山
黄チーム：市川・岩上
ピンクチーム：大塚・高橋
赤チーム：安部・川畑
紫チーム：現地スタッフ

全校運動会

【競技の流れ】

① 準備体操

② 綱引き

③ 障害物競走

【全体ルール】

- 2種目を通して獲得した得点（ハート）の数が多いチームが勝利。
- 1つのハートを半分にしておき、半分で1点。ハートが1つになると、2点とする。

【必要な道具】

- ゼッケン（カラーフェルト、安全ピン、黒マーカーペン）
- チームコルクボード（コルクボード、色画用紙）
- 得点板（ホワイトボード、磁石、色画用紙）
- 綱（綱引き用）
- 麻袋、紐、割り箸、新聞紙（障害物競争で使用）
- バンダナ（アンカーの目印）

【運動会内容】

① 準備運動（担当：市川）

例年同様、日本でも行われている準備運動（屈伸や伸脚など）を、クメール語で、「モイ、ピー、バイ！」（1,2,3！）と、子どもたちと声を合わせて行った。担当者の市川が前に立ち、子どもたちに真似してもらいながら行った。

② 綱引き（担当：田村）

(1) トーナメント戦で実施。

(2) 1試合、1分間で勝敗を決める。

(3) 校庭に中心線を引き、そこから綱につけた目印がどれだけ遠くにあるかで勝敗を決める。

(4) 競技者以外のチームは応援に励む。

(5) 得点は1位：7点 2位：6点 3位：5点 以下2点ずつ。

③ 障害物競走（担当：安部）

1. 馬跳び：Plas+メンバーが馬になる。1度だけ跳ぶ。
2. 麻袋跳び：麻袋の中に入り、定められた距離を跳ぶ。
3. 紐くぐり：Plas+メンバーが紐を持ち、その中をくぐる。

全校運動会

(1) 1つのチームを2つに分けて、2ヶ所に並ばせる。
(2) Plas+メンバーが補助しながら子どもたち全員が行う。
(3) 馬跳びからスタートする子と、紐くぐりからスタートする子がいる。
(4) 全員終了したチームから勝利。1位から7点。7位は1点。

【運動会を振り返って】

今回の運動会は、綱引きと障害物競争の2競技を追加して行った。

綱引きは大盛況だった。子どもたちにも勝敗が分かりやすく見ている人たちもハラハラするので、一体感が生まれていた。競技しているチームは声を掛け合って懸命になり、待機しているチームもクメール語「スースー！」（頑張れ！）と応援していた。さらに近くで見ていた大人も、負けているチームに参戦してしまうくらい、その場にいた人たちが1つのことに夢中になっていた。

障害物競走は、どの種目も子どもたちが初めて行う競技なので、意図を伝えることが難しかった。また、子どもたちはどうしても補助を必要とするため、Plas+メンバーで全体を見ることが難しく、他のチームの進捗状況を把握することも困難だった。この競技については、全体よりも、個々で盛り上がってしまったことが、反省点である。しかし、確実に子どもたち1人ひとりが活躍できる場面があった点では、良かったと思う。改善点を挙げると、子どもたちが、大人の助けなしに、1人でもできるような種目を、競技の中に取り入れると、より良くなるのではないだろうか。

本来ならば、この2競技の他にも、チーム対抗リレーを行う予定だったのだが、時間の都合上、実施することが出来なかった。例年よりも開始時間が遅れたことや1競技ごとの時間配分のミスもあった。すべての競技を行えなかったことに、後悔はあるが、急な変更にも対応することが出来たことは良かったと思う。

運動会後に、子どもたちだけで縄で綱引きをしている姿を見かけた。私たちの活動が、彼らの心に残ったようで非常に嬉しかった。今回使用した縄は小学校に寄付した。今後、彼ら自身でも綱引きを楽しんでくれると嬉しい。今回の反省点を活かして、今後も子どもたちの思い出に残るような運動会を実施していきたい。

PART 3 シェムリアップ・プノンペン

ここでは、トム・オー村以外でのPlas+の訪問先をご紹介します。
私たちの体験を通じて、少しでもカンボジアに興味を持って頂ければ幸いです。

くっくま孤児院

2月8日木曜日。くっくま孤児院を訪問。くっくま孤児院の正式名称は"CCMHA孤児院～Cambodia's Children Make the Heaven Association～という。くっくま孤児院は昔、CLCA孤児院という名前だった。

CLCA孤児院だった頃は、伝統舞踊を教えている若い先生たちだけで子どもたちを育てていた。そのため、生活が苦しく、運営も厳しい状況だった。しかし、先生たちの想いに感動したNPO法人GLOBE JUNGLEのスタッフである楠さんが、元気いっぱいの子どもたちを応援したいという思いで、共同運営することを決意し、今のくっくま孤児院が誕生した。

私たちはくっくま孤児院に到着したあと、部屋の中の椅子に座らせてもらい、子どもたちの自己紹介を聞くことになった。代表してスレイクォイという女の子が、日本語で挨拶をしてくれた。彼女たちがくっくま孤児院に来るまでの境遇や、育ってきた環境について、非常に流暢な日本語で話してくれた。私たちの想像を絶する過去に、胸が痛くなったが、それを感じさせないくらい彼女たちにはパワーがあった。

その後、子どもたちがみんなで日本語の歌や、カンボジアの伝統舞踊であるココナッツダンスなどを披露してくれた。笑顔で歌ったり踊ったりする姿に見ていた私たちも自然と笑顔になった。

このようなおもてなしを受けた後は、代わって私たちが、交通安全の出前授業を行い、アームリフレクターを1人ひとりにプレゼントした。私たちの話を真剣に、また楽しそうに聞いてくれたこと、そして子どもたちに自分たちのメッセージが伝わったことが嬉しかった。

かものはしプロジェクト

2月16日金曜日。1年生メンバーでかものはしプロジェクトの活動の1つである、susuというブランドの工場に訪れた。

かものはしプロジェクトとは、子どもの人身売買問題を解決するため、子どもには教育を、大人には仕事を提供している団体である。国際協力をテーマに開催されるフェスティバルなどでよく、かものはしプロジェクトを見

る機会があり、メンバーは以前からその活動について興味を持っていた。

かものはしの工場に着くと、沢山の女性や男性が笑顔で楽しそうに働いているように見えた。話を聞くと、仕事だけでなく、勉強もできる場所であるということで、働いている方々はみんな満足していた。

丁寧に手作業で仕上げられたバッグや小物は、どれも上品で素敵な商品だった。そしてこの見学を通じて、自分たちも、物の大切さについて考えることができた。1つのものが出来上がる背景に、どんな人がどのような想いを込めて作っているのか、少し考えてみる。そうすれば、もっとその対象に愛着が湧き、大切にできるのではないかと思った。

アンコールワット

2月17日土曜日。世界遺産のアンコールワット遺跡を観光した。

シェムリアップにある国際的観光地のアンコールワットは、カンボジアの歴史的背景を学ぶうえで重要な場所だ。初訪問の1年生に比べ、4回目

にもなる4年生は知識量も多くガイドの様であった。

カンボジアは政権の交代と共に国家宗教が入れ替わった歴史的背景があり、現在は仏教とヒンドゥー教が合わさったカンボジア仏教が国家宗教である。アンコールワットの中には僧侶がいた他、歴史や宗教を感じさせる阿修羅やナーガの彫刻が刻まれていた。それらを目にして、同じ仏教国である日本とカンボジアの宗教と信仰の度合いの差を改めて感じた

その他にも、江戸時代に徳川家光の命令でアンコールワットの調査に派遣された森本一房による家族の安寧長寿を祈る落書きや、ロン・ノル派がアンコールワットに籠ったポルポト派を攻撃した際の弾痕、反宗教勢力が破壊した首のない宗教像など、目を引くものが数多く残されていた。

以上から、単に遺跡観光を楽しむだけでなく、カンジボアの悲惨な過去、昔からの日本との関わりなど、様々な知識を得ることができ、有意義なアンコールワット見学となった。

カンボジアサーカス・ファー

2月17日土曜日夕方。シェムリアップでサーカス「Phare」を鑑賞した。

このサーカスは、内戦時、難民キャンプのカンボジア人青年たちに一般教育や音楽、絵画等を教えていた、NGO「Phare Ponleu Selpak」（以下PPS）が、彼らの雇用機会のために設立したものである。

サーカスの演目は、舞台と観客席の距離が近いこともあり、ダイナミックなパフォーマンスやバンドの生演奏に圧倒された。また、劇はクメール語で進められていたが、英語、日本語、フランス語の字幕が劇場内に用意されていたため、ストーリーもしっかりと理解することが出来た。

そのチケットの売り上げの一部は、PPSの運営資金として、後進の育成に充てられるという。暗い過去を持つカンボジアで、様々な事情を抱えた子どもたちが、芸能分野で生きる力を身に着けている。その姿は、くっくま孤児院の子どもたちとも重なり、ここでも深い感銘を受けた。

アプサラダンス

2月17日土曜日夜。シェムリアップでカンボジアの伝統舞踊「アプサラ

ダンス」を鑑賞した。

アプサラダンスは、カンボジアの伝統的な宮廷舞踊の1つである。初めて見た時、そのきらびやかな衣装に目を引かれた。アプサラダンス特有の手に特徴のある動きは、日本の伝統舞踊とはまた違う雰囲気があった。

ベンメリア遺跡

2月18日日曜日。アンコール7大遺跡の１つである、ベンメリア遺跡を観光した。

ベンメリア遺跡は、スタジオ・ジブリの映画作品『天空の城ラピュタ』のモデルとなった場所でもあるという。ジブリファンにはたまらない場所だろう。木の枝でできたブランコや、瓦礫の山は、写真を撮るのに最適だったが、年々立ち入り禁止の箇所が増えていることは、少し残念だった。

密林に広がるこの廃墟は、中を歩き回ると、探検家になったような気分になれる。1年生は初めて見る遺跡の迫力に圧倒されていた。

トンレサップ湖

2月18日曜日夕方。トンレサップ湖を観光した。

トンレサップ湖は、東南アジア最大の湖である。その豊富な水と漁業で、カンボジアの人々の生活を支えており、「カンボジアの心臓」とも呼ばれているそうだ。

私たちは、定員30人程度の木製ボートに乗りながら、川沿いに立ち並ぶ水上村の高床式住居や、住民の生活を間近で見ることができた。

暗くなってから周囲を見渡すと、１世帯で1つの部屋しか灯りが点いていない家が多く目についた。家族が1つの部屋に集まって暮らしている様子が、思い浮かんだ。日本とは異なる生活スタイルで、大自然と共存していることを感じた。

帰りにボートのエンジンが故障するハプニングがあったが、果てしなく広大な湖から見た夕日は、とても綺麗だった。皆、その絶景に魅了されつつ、それぞれ、水上で生きる人々に想いを巡らせていた。訪れることができて、良かったと思った。

タヤマビジネススクール

2月21日水曜日。この日はタヤマビジネススクールを訪れた。

この学校は、カンボジアで、学びたくとも学べない、働きたくとも働けない若者たちに、その機会を提供するために設立された。

Plas＋としての訪問は今回で3回目となる。タヤマの学生は、とても日本語が流暢で、礼儀正しかった。教室に着くと「おはようございます」と揃った大きな声で挨拶をしてくれた。その迫力のある挨拶に、初めて訪れたメンバーは度肝を抜かれた。その学生の中には、日本に行った経験がある人や、訪れてみたいという人が大勢いた。皆それぞれの興味関心を持ち、いつかは日本で仕事をするため、一生懸命日本語の習得に励んでいた。

私たちは、タヤマの学生と、5つの混合グループに分かれて、自己紹介をした。また、お互いのことを質問しながら交流した。会話の中では、所々言い間違いはあったものの、日本語で一生懸命に伝えようとしていた姿はとても印象的で、外国語学部の私たちが見習うべきものだった。

最後に、タヤマの学生と昼食を共にし、団欒の一時を過ごした。今回、私

たちが交流したのは、日本語を勉強して3ヶ月の学生であった。それにも関わらず、日本人の私たちとこんなにも会話が通じることには、驚かされた。カンボジアでの私たちは、様々な場面で言語の壁にぶつかっている。もし私たちが、逆に彼らの言葉を習得していたら、滞在中の生活や活動を、より円滑に進めることができただろう。

それを実現するためにも、私たちは改めて、タヤマの学生のように、必死に言語を学び、伝えようと努力することが大切なのだと学んだ。

トゥールスレン博物館

2月21日水曜日午後。トゥールスレン博物館を訪れた。

トゥールスレンはカンボジアの悲しい過去の歴史を象徴した建物の1つだ。その場所はかつて、ポルポト時代の収容所で、拷問のために使われていた。プノンペンの中心から南方に位置し、現在の住宅街の中に、その施設はある。中に入ると、過去の暴虐の歴史が生々しいほどに残っていた。館内に

は、その被害者の写真が、一枚一枚パネルで掲示されていた。幼い子どもの服もあった。そして、生還者が描いたあの時の現状がすぐに想像できるような絵もあった。ひとつひとつのことが心に刺さった。

今ではとても考えられない出来事が、そこでは起こった。その日、私たちが感じた暖かい日差しと、心地よい風は、当時と変わらずのものだったのだろうか。

キリングフィールド

（写真にはボカシを入れています）

2月22日木曜日午前。キリングフィールドを訪れた。

ここは、トゥールスレンから連行されてきた人々が、強制労働の末、虐殺された場所である。入って真正面に慰霊塔があり、そこには亡くなった方々の骨が約9,000体、保存されている。トゥールスレン博物館とはまた違った雰囲気で、緊張感が漂っていた。そして、より静かだった。入場して配られる音声ガイドを聞くと、各場所に深い意味があった。その中には、何か

を掘った跡もあった。そこに遺体を埋葬していたそうだ。そのような窪みが、キリングフィールドには連なるようにあった。

他にも、多くの遺体が発見された小屋のような建物、赤ん坊の頭を打ち付けて虐殺をしていたキリングツリーを見て回った。五感を使って、想像力を働かせようと努めた。カンボジアで活動をする以上、現代のことはもちろん、その歴史についても、深く学んでいかなければならない。

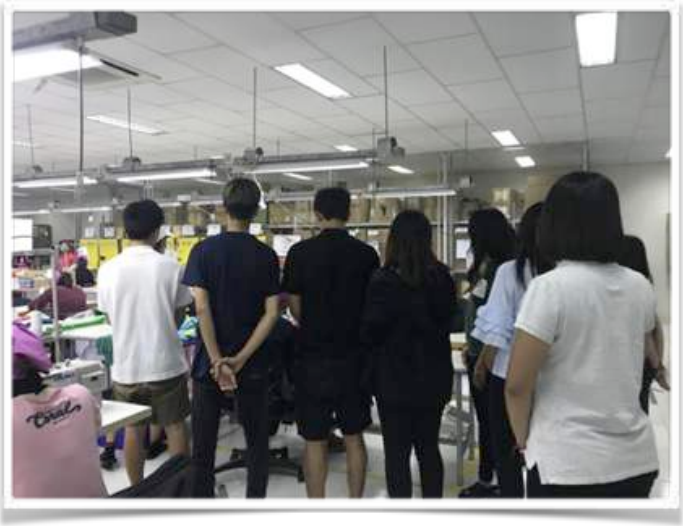
日本・カンボジア絆フェスティバル

2月22日木曜日夕方。カンボジア日本人材開発センター（Cambodia Japan Cooperation Center 通称CJCC）で開催された「日本・カンボジア絆フェスティバル」の開会式に参加した。

開会式では日本とカンボジア、両国の伝統舞踊等が披露されたり、カンボジアで有名な女性歌手Meas　Soksopheaさんが登場したり、と終始盛り上がっていた。特に和太鼓の演奏には、会場全体が歓声に沸いていた。

会場の入り口付近には造花の桜が飾られ、夜はライトアップされていた。この桜の演出は、Plas＋の友人であり、在カンボジア日本大使館で働くカンボジア人のラトキヨさんが、全日本空輸株式会社とコラボレーションをして製作したものだという。日本に行かなくても桜を楽しむことのできるこのそのブースは、連日大人気で、フェスティバルに来たカンボジア人の多くがこの桜を写真に収めていた。彼らが、日本という国を好いてくれているようで、とても嬉しく、また誇らしくも思えた。

フットマーク株式会社工場



2月26日月曜日。フットマーク工場を見学した。

このフットマーク株式で会社は、スクール水着などの学用品や、介護用品などを作っている。また、それだけではなく、赤ちゃんからお年寄りまで安心・安全に商品を使用してもらうために、情報発信も徹底している。

こちらの工場のCEOの池田さんは、とても親しみやすい方で、工場の中を

案内してもらいながら、１か所ずつ丁寧な説明をしてくれた。そのとき、メンバーは、工場内に音楽が流れていることに気づいた。これは、スタッフの方々が作業に飽きずに、少しでも楽しく働けるための工夫で、池田さんの発案によるものだという。

商品のほとんどが手作業で作られ、運動会で使用するハチマキ１本でさえも、10人で分担しながら行われているのに驚いた。多くの人の苦労によって作られてることを知った分、日本での販売価格とのギャップを感じた。自分が小学生だった頃を振り返り、当時の道具をもっと丁寧に使っておけば良かったと思った。帰国してからも、この想いを忘れず、物の大切さを周囲と共有していきたい。

また、有り難いことに、この日は、工場内の事務室で昼食も頂いた。食堂で調理されたもののようで、ほとんどのメンバーが、美味しさのあまり、おかわりをお願いしていた。お腹も心も満たされた幸せなひと時だった。

ロン島

ロン島

2月23日金曜日。私たちは「カンボジアの秘島」ともいわれているロン島に向かった。

4年生にとってそれは、今回の渡航を締めくくる2泊3日の卒業旅行を兼ねていた。まず訪れたのは、カンボジア随一のビーチリゾートとして開発が進むシアヌークビルだ。そのシアヌークビル沖に、ロン島はある。

プノンペンからバスやスピードボートを乗り継ぎ、約6時間。決してアクセスは良いとは言えず、その道中も快適とは言えない。しかしロン島に足を一歩踏み入れると、険しい道中のことも一瞬で忘れてしまうほどの景色が広がっていた。

「秘島」といわれるだけあり、まだまだ未開拓のロン島は、観光客も少なかった。それはまるで、ゆったりとした時間が流れる海と森の楽園であった。余計なものを全部取っ払って、日常を忘れることのできる空間がそこにはあった。私たちは、各々自由にそこでの3日間を過ごし、最後の思い出を作った。

カンボジアといえば、世界遺産のアンコールワットをはじめとする遺跡観光のイメージが強いだろう。しかし、ロン島のような美しいビーチリゾートが存在することも、多くの人々に知ってもらいたい。

PART 4 メンバーの感想

ここでは、個々のメンバーが、自らの文章で、今回の経験を振り返ります。

同じ場所で同じ時間を過ごしても、1人1人、物事の感じ方は微妙に違っていました。そのことを、それぞれの手記からお伝えできれば、と思っています。

4年生

市川 舞夏

国際交流・国際協力専攻4年

最後の渡航

【はじめに】

今回の渡航は、4年生は最後の、2年生は後輩を引き連れていく初めての、1年生は初めての渡航となり、各学年重要なものとなった。

今回の渡航目的は、1年生にカンボジアを知ってもらうこと、そして完成した塀のセレモニーに参加することの2つだ。渡航準備を入念に行い当日を迎えることができた。私たち4年生は、泣いても笑っても最後の渡航であった。そのため、今まで以上に、Plas+が設立以来掲げているモットーの“プレゼントラブ”の気持ちや、今まで私たちを応援してくださった皆様への感謝の気持ちを忘れずに過ごそうと意気込んでいた。

そして、皆様の思いと共にカンボジアへ渡った。

【出前授業】

今回の渡航でも出前授業として運動会と交通安全を行ったのだが、今年も

市川舞夏

私は運動会を担当した。

Plas+のメンバーも増え、運動会の担当者も増えたことで準備段階から当日まで非常に効率よく円滑に進んだ。今回の運動会の新たな取り組みとして、綱引きと障害物競走の2種目を加えた。結果として、子どもたちもメンバーも楽しめたので成功だったが、個人的には最後の運動会だったにも関わらず、不完全燃焼に終わった。なぜなら、本来ならば上記の2種目とチーム対抗リレーの3種目を予定していたのだが、時間の都合上、3種目を行うことができなかった。また、障害物競走も運営の仕方と種目選択の改善をするべきだった。今回の運動会は個人的に反省すべき点が多かった。だが、私にはもう次がないので、ぜひ今回の反省を後輩たちに活かしてもらい、もっとパワーアップした運動会を行って欲しい。

反省点は多いものの、やはりメンバーも子どもたちもみんなが笑顔になり、楽しめたことには違いない。それが1番の成果である。メンバーがそれぞれクメール語も覚えて、これまで行ってきた運動会の中で、最も子どもたちとコミュニケーションをとれたのではないかと思う。今後の運動会にも期待したい。　交通安全の出前授業では、こちらも初の試みで、前回の紙芝居の続きのストーリーで寸劇を行った。こちらは非常に大成功で、子どもたちがストーリーの内容だけでなく、視覚からも楽しめたのが大きかった。酔っ払い役がいたのだが、酔っ払いが出てきただけで、子どもたちは笑っていた。

今後の課題は、塀も完成し、アームリフレクターも配布したので、その後の経過を十分にみていく必要がある。物質支援だけにならないように、子どもたちや村の大人たち自身が交通安全に対して意識を高めてもらうのが大事になる。しかし、人の意識を変えていくというのは非常に難しい。なので、まずは私たちPlas+と現地の人との信頼関係が重要になる。

市川舞夏

これからも後輩たちには交流を続けてもらうと同時に、社会人になっても私自身、トムオー村に足を運び関わり続けていきたい。

【塀完成式】

今回の渡航の一大イベントであった、塀の完成式。一言で言うと、夢が叶った瞬間で、今まで味わったことのない幸せな時間だった。

村中から大人と子どもが集まり総勢300人規模のセレモニー。そして、日本からご多忙の中、RODAの木下さん、小西さん、俣野さんが出席して下さった。無事に全員が揃い、式が始まった。完成したばかりの門の外から学校を見た。そこには、私たちがカンボジアに行こうと決めた原点である「僕たちは世界を変えることができない」の映画で観たセレモニーの様子と同じ絵が私の目の前にあった。あの映画に憧れて、学生団体を設立し、カンボジアのために何かしたいと思い活動をし続け、時には困難に直面しながらも諦めず、この日まで突っ走ってきた。

式中で歌を歌っているとき、これまでの4年間の軌跡が頭によぎった。語りつくせいないくらい“本当に”様々なことがあった。胸がいっぱい、いっぱいになって、涙が止まらなかった。でもそれは、私だけではなかった。4年生のスピーチのときの後輩たちの泣き顔を見たとき、私にはきっと理解できない感情で胸がいっぱいになっているのだろうと思った。カンボジアや子どもたちのことを何も知らないのに、今まで必死についてきてくれた1年生、そして、4年生のことやPlas+のことを誰よりも理解し支え続けてくれた2年生。彼らへの感謝の気持ちで、私の心は溢れた。

同時に、これまで一緒に活動し続けてくれた現地のカウンターパートたち、そして、日本でずっと応援し支えて下さった皆様、塀建設に向け資金協力して下さった皆様、数えきれないほどの方々に協力して頂き、あのような

立派な完成式ができたのだと実感した。私たちの力だけでは絶対に達成することはできなかったと思う。

ありきたりな言葉だが、私の心は本当に感謝の気持ちで溢れていた。この塀やセレモニーは、私たちだけでなく、現地のカンボジア人、そして、日本にいる多くの応援者様からの、最大の“プレゼントラブ”であった。

【最後に】

私には、叶えたい夢があります。それは、一生をかけてカンボジアに恩返しをすることです。それも、私の大好きなスポーツを通して。

なぜスポーツなのかというと、まずは自分の心が豊かで健康でないといけないからです。何かをするなら好きなことをしたい。そうすれば、それに取り巻く苦手なものでも頑張れるはずだからです。私は、“誰かのために何かしたい”そう思って活動してきました。でも、4年間カンボジアに行き続けて気づいたことがあります。

それは、カンボジアに行くことで私の心が満たされ、幸せな気持ちになり、カンボジア人と接することで優しい気持ちなり、新しい発見があって楽しくなっていたのです。私が、カンボジアから、たくさんのものをもらっていました。私はカンボジアにいるときが１番幸せです。だからこそ、どんなことでも頑張れました。４年間の活動中、心が折れることも、悔しいことも、辛いことも、苦しいことも、たくさんありました。でも、やめたいと思ったことはありませんでした。カンボジアが好き、その気持ち一直線でした。

だから、大学を卒業した後も、自分の好きなことをして、自分が豊かになって、その先に誰かを笑顔にできたらいいなと思います。このように、カンボジアと出会ったことで、自分の価値観も覆され、夢も描くことが出来ま

した。そして、麗澤大学に入学し、カンボジアと出会ったことで、一生涯の仲間にも出会えました。Plas+の仲間や後輩には“ありがとう”の言葉では表現しきれないくらい感謝しています。彼らに出会えたことは私の一生の財産です。そして、この４年間の思い出も一生の宝です。本当に幸せな大学生活でした。

最後になりますが、この場をお借りしまして、お礼を申し上げます。設立当初から今までPlas+の応援をして下さる皆様、活動に協力して下さる皆様、4年間本当にありがとうございました。私たち4年生は卒業してしまいますが、後輩たちはこれからも挑戦し続けると思うので、まだまだ未熟なPlas+ですが、これからもご指導と応援をどうぞよろしくお願い致します。Plas+の活動を通して出会えた皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

大久保 佳織

国際交流・国際協力専攻4年

4年間の振り返り

【はじめに】

今回、クラウドファンデング成功が、プロジェクトの成功になったと言

大久保佳織

っても過言でもありません。ご協力頂いたたくさんの方に心から感謝しております。皆様からの応援やメッセージがどれだけ力になったことか。私たちが挫けそうになった時に支えてくれたのは皆様の応援のおかげです。

今回の報告書でご協力頂いた皆様への感謝の気持ちと、私たちのカンボジアに対する熱い思い、メンバーへの気持ちを見て頂けたらなと思います。少々恥ずかしいぐらいの熱量をお見せする箇所も多々あると思いますがこれが私たちの正直な気持ちなので、温かい目で見てくださるとうれしいです。改めて今回Plas+の活動に共感して頂き、そして力を貸してくださり、ありがとうございました。

Plas+という団体を立ち上げてから早4年が経ち、一本の映画をきっかけに4年生はここまで突っ走ってきました。

時には周りが見えなくなるほど本気で、全力でここまでやって来ました。たまに立ち止まって後ろを振り返るといつも誰かが居てくれました。そして卒業を迎え、改めて振り返ると今までに無いくらいの方たちがそこにはいて、離れてしまったと思っていた人もそこには居てくれて、今まで行ってきたことは間違っていなかったんだと感じることができました。それだけのたくさんの人に4年間支えられてPlas+の塀建設プロジェクトも節目を迎えることができたと改めて実感しました。

世間知らずで国際協力の右も左もわからない状態から、たくさんの方のご指導、応援、時には渇を入れていただいたおかげでここまで成長することができました。この場で、今までPlas+に関わってくださった全ての方に感謝の気持ちを伝えさせてください。本当にありがとうございました。

【プロジェクト達成】

私は今回、カンボジア渡航へは行っていない。苦渋な決断だったが、

大久保佳織

Plas+と同等に力を注いできた活動を優先した。それゆえ、今回は塀建設プロジェクトの感想を書きたいと思う。

トム・オー小学校に塀を建設するプロジェクトが決定し、約1年前に本格始動した。物品販売、募金活動、クラウドファンディング、協賛･･･ありとあらゆるものに挑戦をした。挑戦した分だけ何度も悩み、時にはプロジェクトは本当に成功するのか？不安になることもあった。しかしどの活動においても全て人と関わるものであった。時には厳しいお言葉も頂いたが、うれしいお言葉もたくさん頂くこともできた。たくさんの方がこの活動に共感して協力してくれた。それが私たちの活力になり、カンボジアの子どもたちの顔を思い出して常に努力することができ、このプロジェクトを達成することができた。

4年前は『僕たちは世界を変えることができない』に憧れて、「何かやってみたい」ただその気持ちだけで大学を受験した。それが4年間Plas+の活動を通して様々なことを経験した結果、自分ひとりがやりたいと言ってもプロジェクトを成功することは不可能で、例えできても微力でしかないことに気づいた。仲間と協力すること、自分の気持ちだけでなく相手のニーズに寄り添うことで、気がついたらたくさんの方が応援してくれて、ひとつのことを成し遂げられることを知った。

また「ボランティアは与えるものより与えられるものの方が多い」というものを実際に感じたことも大きい。よく友達に「カンボジアに塀を作るなんてすごいね、子どものために頑張っているね」そう言われる。その度に「何もすごいことなんてしてないんだけどな･･･」と感じていた。きっと４年前の自分にこのような友達が居たら同じことを言っていたかもしれない。一見そう見えるかもしれないが、私たちはカンボジアの子どもたちから生きるパワーをもらっているのだ。

大久保佳織

私にとってPlas+の活動は、考えの幅が広がり人として成長させてくれた。人間らしさや生きる力を教えてくれ豊かな心を与えてくれた。人生の目標や向上心を持たせてくれた。逆にこんな幸せな人生を歩ませてくれたことにどうお礼を言ったらいいかわからない。これほど価値のある過程は無いのではないかと、この塀建設プロジェクトを通して感じた。

【最後に】

この１年間、必死な私たち４年生に全力で付いてきてくれて、どれだけ疲れていても真面目に活動を行ってくれた1年生。先輩でもあり後輩でもあり自分たちのやりたいことも少しずつ見えてきながらも、伝統を繋げていくために真剣にPlas+について考えてくれていた2年生。私たちは本当にみんなが大好きです。これからみんなが作っていくPlas+が、楽しみで仕方ありません。

空白の3年生の代には実は･･･内尾先生！私たちの面倒を見てくださって3年が経ちました。先生には本当にお世話になったことが多くて感謝してもしきれません。時には研究者として、時には先生として、時にはお兄さんとして。様々な面でいつも助けていただきました。先生なしには今のPlas+はありません。

そして4年生。今まで本当にいろんなことがありました。辛いときも悲しいときもいろんなことがあったけど、初めてカンボジアに行った時の子どもたちの笑顔や活気、忘れられずどんなときも全力でここまで来たよね。Plas+設立当初には考えられない私たちの終止符。たくさんの人に恵まれて本当に幸せだった。これからはOGとして大好きなメンバーに、大好きなカンボジアにお礼していこうね！

大塚 桃香

国際交流・国際協力専攻4年

学生国際協力団体の可能性

【はじめに】

Plas＋を結成して4年目。ついにPlas＋としての最後のカンボジア渡航を終えた。今回の渡航は、塀建設プロジェクトを行うにあたって今まで以上にたくさんの方々への想いが詰まった渡航であった。

一番の成果として捉えることのできる塀建設プロジェクトの成功は、数え切れないほどの多くの方々の協力あってのものであり、結成メンバーの私たちにとっては誰よりも嬉しいことである。また、1年生にとって初めてのカンボジア渡航であるため、カンボジアのことをより好きになり、楽しんでくれるのかが上級生にとっての課題であった。1年生は犬に追いかけられて転んだり、食あたりを起こしたりと様々なハプニングがあったが、結果的には「カンボジアにまた来たい。」、「帰りたくない。」と言ってくれたので、今回の渡航は大成功だと実感している。

それでは、4年間を通じて感じたことを振り返っていきたい。

【学生国際協力団体の可能性】

私は今回の塀建設プロジェクトの成功や4年間の活動を通して『学生国際協力団体の可能性』について考えさせられた。

大塚桃香

Plas＋結成2年目で始めたインタビューリレーでのインタビュイーへの共通の質問として「私たちにできることはなんですか」と聞いていたのだが、ある1人のインタビュイーの方に「学生は時期や時間が限られているから交流面であるソフト面の活動、NPO団体や国際協力団体は現地に特化できる時期や時間が取りやすいからお金に関わるハード面の活動がいいのではないか。」という提案をいただいたことがある。

そのお話を聞いて私たちはソフト面の活動として出前授業を始めたのだが、実際に現地のニーズを聞いた際に塀建設や図書館建設など求められるものはハード面の支援なのだと痛感させられた。

「出前授業をずっと行っていても私たちの押し付けになってしまう。どうしても現地のニーズに応えたい」その一心で始めた塀建設プロジェクト。1年間で170万円ほどの大金を集めなければならない。学生の私たちにとって無謀な挑戦であることは分かっていた。しかし学生でありながらも資金を集める方法を一生懸命に考え、クラウドファンディングや街頭募金、企業協賛、物販販売などの方法を考え付いた。最終的には無事に塀建設資金を集めることができたのだが、塀建設資金が集まるまでの道のりは決して平坦な道ではなかった。

今回の渡航である2018年2月までには塀を完成させたいという気持ちから、私たちに与えられた塀建設のための資金集めの期間は短く、本当に170万円もの大金が集まるのかと不安と焦りでいっぱいだった。しかしそんな中でも、様々な場面で数え切れないほどの多くの方々の協力や応援がいつもあり、その愛があったからこそ最後まで諦めずに塀建設プロジェクトを成し遂げることができたといえる。

私は今回の活動や4年間でのPlas＋を通して学生国際協力団体でもソフト面だけではなく、ハード面の支援を行う事ができるということを実感し

た。学生団体が連続的なハード面の支援を行う事は難しいと思うが、現地のニーズに応えたいという強い意志があれば必ず成功することができるということを証明してくれた。そして何より、そこには数え切れないほどの多くの協力や応援をしてくれた方々の存在を忘れてはならない。

【展望】

私は大学生活4年間の中で様々なことに挑戦してきた。

その中の1つがPlas＋である。大学入学当初は「何か国際協力をしたい」と曖昧な目標を持っていたのだが、今では「Plas＋の活動で経験したことを活かして、カンボジアの良さや異文化など、カンボジアについて知ってもらいたい」という明確な目標に変わった。

私は将来、中学の英語教員を目指しているため、教育の現場で子どもたちを中心にPlas＋の活動を通して学んだことを伝えていけたらと考えている。実際に私のアルバイト先である塾の生徒にカンボジアの話をすると「知らなかった」、「おもしろい」など興味を持ってくれる子がほとんどであった。その目的としては、カンボジアのために何かしてほしいというものではなく、カンボジアや私の経験した話を通して少しでもその子がカンボジアの良さや異文化について知り、それらについて考えてほしいという想いからである。

卒業後は自分なりに国内でPlas＋の活動を通して経験したこと活かし、カンボジアについて発信していきたい。

【最後に】

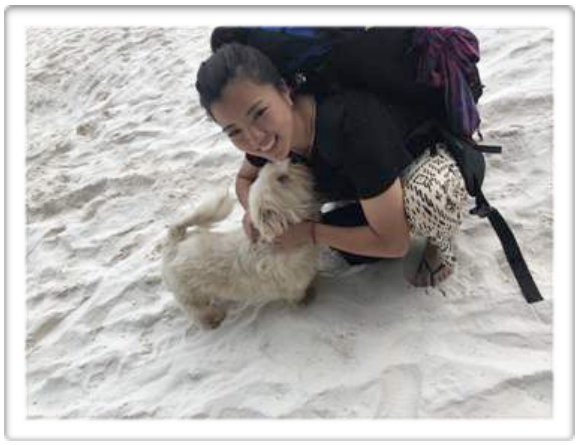
資金集めをしていた時は現地に行ったことがなかったのにも関わらず、トム・オー小学校の子どもたちのために一生懸命に資金集めを行ってくれ

た1年生。いつの間にかたくましく頼もしい存在になっていた2年生。最後まで私たちについて来てくれてありがとう。どうか今後も無理のない程度で活動を続けていってほしい。また、Plas＋の顧問である内尾先生には感謝しきれないほどPlas＋にとって大きな存在である。内尾先生の的確な助言やアイデアがあったからこそ今のPlas＋があるといっても過言ではない。本当にありがとうございました。今後ともPlas＋をよろしくお願いします。

　そして何より4年間学生国際協力団体として活動し、1つ大きなプロジェクトを成し遂げられたのはPlas＋だけの力ではなく、いつも応援し協力してくださる皆さまが居てくれたからだ。感謝しきれないほどの想いであり、どうか後輩たちが引き継いでくれるPlas＋をこれからも見守っていただけたら幸いです。Plas＋に関わってくれた多くの方々へ、愛を込めてオークン（クメール語で、ありがとうございます）。

村瀬 朱里

国際交流・国際協力専攻4年



7度のカンボジア渡航を経て

【はじめに】

　今回の渡航はPlas＋がこれまで行ってきた『トム・オー小学校における安全な学び場プロジェクト』の集大成というものなのだろう。出来るだけ現

村瀬朱里

地のニーズに応え、子どもたちの笑顔を守っていきたいと始めたこのプロジェクトの最終目標は塀建設。

この渡航はそんなプロジェクトの最終目標が達成され、塀完成セレモニーへの参加が第一の目的であった。塀完成までの3年間、数えきれない程の困難があったが、その度に仲間たちと想いを確かめ合って前を向き続けてきた。苦楽を共にした仲間たちと迎えた塀完成セレモニー当日のことを私は一生涯忘れることはない。

麗澤大学国際協力団体Plas＋のメンバーとして渡航できる最後のカンボジアは、毎日の１分１秒が惜しく、愛おしいと感じられる日々だった。Plas＋としての活動を終えた今、現地でのことやこれまでのことを振り返ってみたい。

【出前授業を終えて】

前回に引き続き行った交通安全の出前授業では、塀が完成した今、小学校内の安全は保たれるが、小学校の外は何が起こるか分からない。その為、小学校の外の安全にも目を向け、起こりうる危険から子どもたちを守りたいという目的があった。

Plas＋オリジナルのアームリフレクターを作成したのはいいものの、それをどう授業で生かすことができるか、一体どうすれば子どもたちに楽しく使い方と愛着を持たせることができるかが課題だった。試行錯誤した結果、劇の中にアームリフレクターを登場させ、子どもたちに使い方を伝えることになり、私たちは当日、『命を守る幸運のお守り』と題した劇を披露した。

前回の授業で実施した交通安全紙芝居『命を守る右、左』物語の続きを考え、披露した劇は子どもたちの興味を引き、大きな反応を伺うことがで

きた。子どもたちは私たちの話すクメール語にも理解を示し、終始劇を楽しんでくれていた様子だった。

この結果から、前回以上に子どもたちの反響が大きかったのは、慣れ親しんだ物語の内容の考案と、メンバーのクメール語の上達の理由が挙げられる。最初から最後まで通訳を介さずとはいかなかった為、今後もクメール語の習得には力を入れなければならないが、これまでの成果が見えたことは嬉しく思う。

これまでトム・オー小学校では2度、交通安全の出前授業を実施してきたが、塀が完成したことでプロジェクトは終了し、残すところはアフターケアのみとなる。しかし、村全体で交通安全を意識し、子どもたちの安全を守っていくというのは、トム・オー村の永遠の課題である。この課題は、学生団体には難しいといわれている“継続性”を重視することで、少しは補うことが出来るのだろう。継続的な関係を保つことでトム・オー村の人々が交通安全を意識してくれることを期待し、後輩たちにはトム・オー小学校での活動の幅を広げていってほしいと願っている。

【塀完成セレモニーに参加して】

2018年2月14日、トム・オー小学校で塀完成セレモニーが行われた。これまで沢山の温かいご協力をして下さったRODAの方々、毎回の渡航をいつもスペシャルになるよう手伝ってくれる現地カウンターパートの方々、そして、これまでいくつもの困難にぶつかりながらも鼓舞し合って前を向き続けてきた仲間たちと迎えた塀完成セレモニー当日。私たちの目の前には確かにトム・オー小学校の四方を囲う塀が建っていた。

塀完成セレモニーは現地カウンターパートのソパートさん手配の下、進められた。トム・オー小学校の子どもたちの他、村人が約300人集まる盛大

村瀬朱里

なセレモニーで、村全体で塀の完成を祝うことのできた日だった。

塀完成セレモニーの間、私はこれまでのことを1つ1つ思い出していた。「私たちもカンボジアで何かしたい！」と団体を立ち上げ、勢いを武器に活動していた1年目。内尾先生とトム・オー小学校との出会いによって大きくPlas＋の可能性が広がった2年目。トム・オー小学校を今後の拠点地と決め、初めて出来た後輩たちとプロジェクトを練り、塀を建設すると決めた3年目。8人の新しい後輩が仲間に入り、16人となったPlas＋で塀建設費用をがむしゃらに集め、泣いて笑った4年目。振り返ってみると、どんな時でもPlas＋の隣には大勢の応援団がいた。

カンボジアで何をしたらいいか分からず思い悩んでいた時は親身になって相談に乗って下さる方がいたことを思い出す。トム・オー小学校に塀を建設すると決めた時、「本当に出来るのか？」と疑う声も多かったが、「頑張れ！」の声はもっともっと多かった。クラウドファンディングや街頭募金活動では見ず知らずの多くの方が大切なお金をくださった。私たちが最後の日まで全力投球できたのは、想いに共感し、背中を支えてくれた応援団がいたからだ。団体発足から塀建設まで、私たちだけでは成しえなかったことが本当に沢山あったのだと実感している。

そして、そんな大勢の応援団の方々に「無事に塀が完成しました」と報告ができる喜びを今、噛みしめている。

2年生

安部 和佳奈

国際交流・国際協力専攻2年

かけがえのないカンボジア渡航

【はじめに】

私は今回で4回目のカンボジアになる。行くたびに大好きになるカンボジア。今回の渡航は私たち2年生にとって、初めてカンボジアに行く1年生と今回で最後のカンボジアになる4年生と一緒に行く特別な渡航だ。

また今回の渡航のメインとなる“塀完成セレモニー”を控えていた。塀完成セレモニーは私たちが1年間、全力で活動してきた想いやPlas+のことを応援して下さる皆様の想いがたくさん詰まった心温まるセレモニーとなり、トム・オー小学校の子どもたちだけでなくトム・オー村の人々へ私たちの愛を届けられた。

みんなで過ごした3週間は本当にあっという間だったが、とても中身が濃い実りのある渡航になったと思う。これからPlas+のみんなへの想いと一緒に渡航を振り返っていこうと思う。

安部和佳奈

【活動と学び】

まずは1年生。初めてカンボジアに訪れた1年生はとてもキラキラしていた。たくさんのバイクやカンボジアのご飯のにおい、トゥクトゥクに乗ることなど、何もかもが新鮮で、頑張って話せるようになろうとカンボジア人の友人からクメール語を教えてもらっていた。その姿は１年前の私たちを見ているみたいだった。特に私たちの活動場所であるトム・オー小学校へ初めて訪れた際はみんなそれぞれ、日本語で名前を教えてあげたり、こちょこちょ遊びをしたり、子どもたちと仲良く交流していた。この1年間トム・オー小学校の写真や私たち先輩の話でしか知ることができなかったが、この活動に全力でついてきてくれた1年生には感謝しかない。

1年生みんな初めてのカンボジアで楽しんでいたが、緊張や不安を持った渡航でもあったと思う。そのため体調を崩してしまう子や、ケガをしてしまう子がいた。これからは誰か必ず一緒についてあげたり、救急箱を作ったりするなど、自分たちでできる備えをして、2年生は最高学年として責任を持ち、後輩の体調を配慮しながら渡航日程をしっかりと組んでいこうと思う。

次に2年生。1年前にみんなカンボジアに訪れていたが、全員揃ってカンボジアに行ったことはなく今回の渡航が初めて全員揃ったカンボジア渡航だった。この2年間、4人で何度もぶつかったことがあった。だがその倍仲良くなっていき、今では何でも話し合える家族となっていた。この3人とPlas+なしでは今の私はないと言っていいほどの存在になっている。これから2年間は私たちが最高学年になり偉大な4年生それぞれの想いを引き継いでいけるか不安が残るが、この3人とならどんなことでも乗り越えていけると私は信じている。また今回のカンボジア渡航で4人での思い出も増え、本当に嬉しく思う。

安部和佳奈

次に4年生。一緒にカンボジアに行くのが最後になる４年生。１年前“トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト”の形成から塀完成セレモニーまで一緒にカンボジアで活動してきた。この２年間はあっという間だったと改めて思う。トム・オー小学校で行った出前授業や運動会、アンコールワットなどの観光地、移動するためにいつも乗るトゥクトゥクでさえもすべてが私にとってかけがえのない大切な思い出だ。そう思えたのは4年生が愛を持って私たち後輩のことを思い、接してくれていたからだと感じる。言語や知識も大切だが、愛が1番大切だとPlas+で活動を共にして身をもって学んだ。私たち後輩は４年生からプレゼントされた大きな愛を忘れず、これからの活動に励んでいきたい。

【最後に】

今回の渡航、特に塀完成セレモニーを通してたくさんの方々がPlas+のことを応援してくださり、支えられているからこそ活動ができているのだと改めて感じた。また日頃からお世話になっているRODAの方々が、お忙しい中わざわざトム・オー小学校へ来てくださり塀建設にご協力してくださった。また、クラウドファンディングや募金活動等をしていた際はたくさんの方々に声をかけていただき応援していただいた。

私たちはPlas+に関わる全ての方々への感謝を忘れず、カンボジアだけでなくフィリピンや日本、たくさんの方々に全力で“Present love”をしていかなくてはいけない。そしてみんなにとってかけがえのない思い出の1ページになることを目標に頑張っていく！

小川 龍星

国際交流・国際協力専攻2年

カンボジアでの学び

【はじめに】

今回の渡航を一言で表すなら“笑顔”だと思う。渡航目的は出前授業の実施と塀完成セレモニーを行うことだった。私にとってかけがえのない思い出となった渡航を振り返ってみようと思う。

【出前授業】

子どもたちに「交通安全」を意識してもらうために私たちは出前授業を通して継続的に活動してきた。

今回は「アームリフレクター」を子どもたちに日常的に利用してもらうことを目標として低学年でも理解できる内容に心がけた。本番の数十分前まで練習して準備は完璧な状態だった。

しかし結果は私が想像していたものとは異なっていた。子どもたちは楽しく夢中になって劇を見てくれたが、そこには温度差があったと感じた。私はトム・オー小学校で出前授業に参加するのは初めてだった。だから子どもたちの反応を見るのも初めてだった。正直、学校全体に正しく伝わったかと聞かれたら「はい」とは言えない。授業に参加していた生徒は時間帯的に低学年ばかりだった。また通訳を通して行ったので私たちの思いが

どこまで伝わったかも子どもたちの表情からしか掴めない。

人に何かを教えることは想像していたよりも難しいことだと痛感した。限られた期間の中で「意識改革」という目に見えない結果を求めることは自己満足で終わってしまうのではないかと思った。

【塀建設】

トム・オー小学校の校庭にはバイクや耕運機が横切っていた。学校の先生、保護者も子どもたちが事故に遭わないか不安視していた。

私たちは彼らのニーズに応える形で新たな塀を提供する決意をした。約170万円の途方もないプロジェクトに対して私は「無理」だと思っていた。おそらくプロジェクト当初は実現することができるのか、みんな悩んでいたと思う。クラウドファンディング、街頭募金、学内募金、物販、企業協賛を通して資金を募った。何度も挫けそうになったが周りで頑張っているメンバーの姿を見て苦手なことにも進んで挑戦した。

今のメンバーだったからこそ塀建設プロジェクトを成し遂げることができたと思う。カンボジアに訪れたことがなかった1年生。彼らにとってこのプロジェクトは先の見えない暗闇を進んでいるような感覚だっただろう。それでも最後まで自分事として考え、ついて来てくれたことに感謝したい。同期のメンバーは同じ学年だからこそ、同じ目線に立ってプロジェクトについて試行錯誤を繰り返した。時には、価値観のずれから衝突することもあった。でも、衝突してきたからこそ理解し合える存在になった。

これからは最上級生として、後輩の上に立つ。きっと何度も壁にぶつかると思うけど、自信を持ってうらら、わかな、ゆうかとなら乗り越えることができると言える。

4年生には感謝してもしきれない。学業やPlas+の活動では、4年生に大

小川龍星

変お世話になった。また、人としても先輩たちを鏡にして2年間学ばせていただいた。ありがとう。

また、日頃からPlas+の活動を応援してくださる方々、塀建設プロジェクトにおいて資金協力、温かいお言葉をかけて下さった方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。Plas+の塀建設プロジェクトは多くの方々に支えられていたからこそ実現する事ができました。これからもカンボジア、フィリピン、日本で私たちなりのPresent loveを全力でしていこうと思います。

【最後に】

今回の渡航のテーマは「笑顔」だと言った。出前授業、セレモニー、子どもたちや大人との交流、たとえ自衛隊訓練所であってもカンボジアでの生活は笑顔で溢れていたPlas+は塀を届ける団体ではないし、先生のようなスキルは持っていない。でも、人を笑顔にする力はある。私はこの世界の共通言語は英語ではなく笑顔だと思った。

私たちはトム・オー小学校で今後どのように関わっていくか考える必要がある。塀を建設したから交通事故がゼロになるわけではない。なにより今後もPlas+が築いてきたトム・オー小学校との関係を大切にしていきたい。私たちにできることは、モノを届けるとか何かを教えるとかではなく、その過程で関わってくれた人を「笑顔」にすることだと思う。

そのために全力で取り組んだことが相手のニーズに応えることや出前授業だったなら、それをすればいい。今回の渡航は、「人の笑顔」に強く感動した。

小田嶋 優花

国際交流・国際協力専攻2年

先輩としてカンボジア渡航

【はじめに】

今回の渡航は、私たち2年生が先輩として新しくPlas＋に入ってくれた後輩たちとのカンボジア初渡航だった。そして、大好きな先輩方との最後の渡航でもあった。

初めて後輩を持ち、期待と先輩としての使命感、そして後輩たちがカンボジアで生活してどう感じてくれるのか不安でしかないスタートだった。渡航中はPlas＋お決まりのハプニングがあり、後輩たちには不安を感じさせてしまったが、それを楽しさと笑いに変えている彼らを見て逞しさと、彼らが先輩になっても後輩たちを任せられると感じた。

トム・オー小学校に訪問した際、子どもたちに好かれるのかと心配していたメンバーや、子どもが得意ではなかったメンバーもいた。しかし、そんなそぶりを見せずに目をキラキラさせながら子どもたちと遊んでいる後輩たちの姿を見て涙が出てきた。何よりも楽しんでいて、子どもたちに愛を届けたいという思いが伝わった。

【プロジェクト成功までの道のり】

去年の渡航から塀建設のプロジェクトは本格的にスタートして、約1年と

小田嶋優花

いう短い期間で成功した。始めた当初は、「学生に絶対こんな大金集められるわけない。」と諦めから入っていた。

後輩たちが入ってきて、彼らの新鮮なアイディアと先輩たちの熱い思いや同期の支えもあって私も絶対に成功させたいと感じた。そして何よりも多くの方たちの協力があったからこそ、クラウドファンディングを達成することができ、募金活動や伝統の日で応援してくれた方々のおかげもあり私たちは最後まで諦めないでいられることができた。

塀完成セレモニーの時、映画『僕たちは世界を変えることができない』の開校式の絵と重なった。「やっと完成した。諦めないで本当に良かった」という思いと、「もう先輩たちとの活動も最後なんだ」という思いが込み上げ終始涙が止まらなかった。カンボジアを大好きになったきっかけも、Plas+に入りたいと思ったのも、今の先輩たちがいなかったら私はここにいなかっただろう。

【最後に】

塀を作ってくれた現地の業者さん、そして通訳のソパートさんたちの協力がなければ立派な塀は建つことはなかった。

いつもPlas＋を応援してくださるRODAの方々、募金活動、クラウドファンディングに協力してくださった方々がいたからこそ、今の私たちが居ると思う。

このプロジェクトに加われたことに感謝、そしてカンボジアの子どもたちの笑顔が見ることができて本当に嬉しく思った。プラスの一員であることに誇りを持ち、これからも子どもたちのために活動をして行きたい。

谷内 うらら

国際交流・国際協力専攻2年

実りの多い渡航

【はじめに】

1年前に初めて訪れて大好きになったカンボジア、右も左も分からず先輩方についていくのが精一杯だった日から私は、今回でこの地に訪れるのは3回目となった。Plas+の後輩にとっては初めての渡航、4年生と行く最後のカンボジア、今まで行ってきた『トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト』の集大成という節目、色んな感情がこみあげてきて一つひとつの出来事を全部心に刻みたい、そう思っていた。

やることも一緒に行く人も出会う人も違ければまた新鮮な気持ちになった。そんな今回の渡航を振り返っていこうと思う。

【トム・オー小学校】

1日目は交通安全の出前授業を行いPlas+オリジナルのアームリフレクターを題材として使い方と効果を分かりやすく理解してもらうためクメール語を使った劇を行った。お話は前回の紙芝居の続きを描いたことで復習もでき、子どもたちは新しい内容も劇と共に楽しみながら理解してくれた様子だった。今回劇中で飛び出し坊やという重要な役を担当させていただき自然と役にも気持ちが入っていた。私たちの行う授業内容が村に浸透し交

谷内うらら

通安全が根付いていくことを期待したい。

トム・オー小学校に到着して目に飛び込んできたのは学校の四方を囲う塀だった。ずっと大好きな子どもたちを守りたくてこの塀を立てるためにメンバーと力を合わせていくつも壁を乗り越えてきた。

クラウドファンディング、街頭募金、学内募金、人の温かさに触れ、私たちだけでなくたくさんの方の思いを実現できたこと嬉しく思う。

一心不乱に走っていたPlas+を応援し支えてくださった方々に本当に感謝している。村で行われた塀完成セレモニーには多くの村人が足を運び歓迎を受けた。何気ない日々が振り返っているととても思い出深くて、大切で色んな感情が込み上げてきて気づけば涙が止まらなくなっていた。

活動を続けてたくさんの人と繋がれていること、メンバーと素敵な時間を過ごせたこと、この日トム・オー村の景色をみんなと見られたことすべてが私にとって頑張ってきたご褒美のように思えた。

【最後に】

トム・オー小学校に塀は完成したが、完全に命が守られる保証はない。子どもたちが学校から出た後、身の安全を守ることを心掛けて生活しているのか今後のアフターケアもしっかりと行っていきたい。

村だけでなくこの活動を国内外で行い、１人でも多くの人に交通安全の大切さが理解されることを期待したい。現地での学びや気づきはもちろん一緒に行ったメンバーの行動から学ぶことも多かった、こんなに幸せで実り多き渡航は一生忘れることがないだろう。今後は新生Plas+となり新メンバーを迎え活動拠点も広げていこうと考えている。

先輩方が築いてきたもの、守ってくれたもの、意思を引き継ぎ私たちは新しいものを生み出しながらPlas+らしく活動を続けていきたい。

1年生

岩上 颯太

国際交流・国際協力専攻1年

初めてのカンボジアを終えて

【はじめに】

私にとって、今回は初めてのカンボジア渡航となった。それに伴ってたくさんの準備をしてきた。先輩方が今まで作り上げてきた塀建設プロジェクトを締めくくれるように、多くの時間を費やし、声をあげ、体を張った。私自身も先輩方の熱につられ一生懸命、体を張った。

しかし、「なぜ先輩方はここまで体を張って活動することができるのだろうか」当時はそう思っていたが、実際に現地に行ってみるとその理由はすぐに分かった。

【活動と学び】

アルンラスホテルから約3時間移動し、初めてトム・リン、トム・オー村に辿り着いた。シェムリアップなどの都会とは違い、どこか落ち着いた温かい雰囲気がこの村から感じられた。

岩上颯太

トム・リン村にある、私たちが泊まったホテルから車を10分ほど走らせると、活動拠点としているトム・オー村に着いた。車から降り、歩いてトム・オー小学校に向かうと、子どもたちが一斉に先輩方の方へ走っていった。そして学校の先生方も笑顔で私たちを出迎えてくれた。

私はこの光景にとても驚いた。先輩方の今までの活動や振る舞いの良さが、このような良好な関係を築いていけるのだと感じた。そしてこの関係をいつまでも続けていかなければと感じた。また、このように出迎えられるからこそ、先輩方は日本での活動も頑張れるのだと思った。

今回の出前授業では、アームリフレクターを使った劇を行った。前日にクメール語を教わり実際に使ってみたが、伝わっているのかどうか分からなかった。他にも、子どもたちに言われた言葉や質問の意味が分からず、しっかりとコミュニケーションが取れなかったことが多々あった。

改めて現地での言葉の壁を痛感させられた。そして現地の言葉を学ぶことは必要不可欠であると感じた。

【最後に】

まずなにより、今回の渡航で、トム・オー小学校の塀完成セレモニーが無事に挙げられたことを大変嬉しく思う。

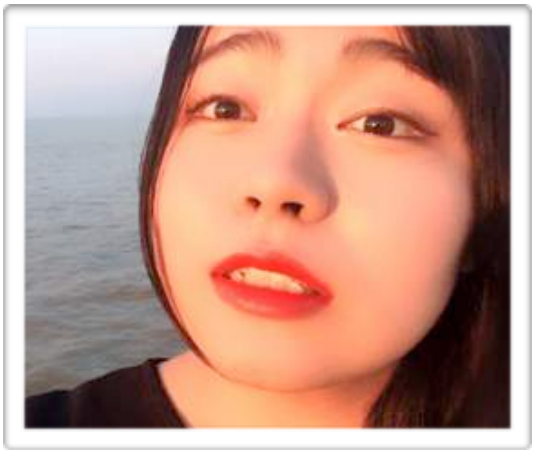
今までの4年間で、現地を見て、現地を調べて、現地の人のニーズを考えて実際に塀を建ててしまう4年生をとても誇らしく思う。これからどんな活動をしていこうとも、しっかりと現地を調べて、相手に寄り添ったプロジェクトをメンバー全員で考えていきたいと強く思った。

また、今回の渡航は人数が多く心配な点があったが、大きな事故や問題がなく無事に帰れたことに関して先輩方、現地の協力して頂いた方々のお気遣いに感謝したい。

そして、私たちのプロジェクトに協力して頂いた全ての方に感謝を忘れず、これからも邁進していきたい。

川畑 美由紀

国際交流・国際協力専攻1年



初めてのカンボジア

【はじめに】

今回の渡航は私にとって初のカンボジアであり、東アジア以外での初の海外経験でもあった。一歩踏み出すだけでこんなにも違う世界が見えるんだと感動を覚えた。電車がなく移動がトゥクトゥクなのも、都市部はビルがそびえ立っているが、少し進むと全く違う景色なのも、全てが新鮮で想像以上だった。

【活動・学び】

私は子どもと触れ合ったことがあまりなく、苦手意識が少しあった。正直今回の渡航がかなり不安だったが、村に着き、小学校に向かって歩いている時に、子どもたちが駆け寄って抱きついてきたことにすごく驚いた。

初対面の私をなぜこんなにも歓迎してくれるのだろうか？そんな疑問が一瞬芽生えたが、すぐに先輩方のおかげだと気付いた。”人とのつながり"と

川畑美由紀

はこの事だなと実感できた瞬間だった。

村でもカンボジア全体でも一番印象に残った出来事は運動会だ。最初の不安が嘘だったかのように、水分補給も忘れるほど全力で楽しんだ。汗と土にまみれた体操着がなによりの証拠だ。通訳のアチョーさんをはじめ、先生方や先輩方のサポート下で子どもたちをまとめ、一緒に楽しみ、嬉しさを分かち合えることができた。

私にとっては初めてのトム・オー小学校ではあったが、1年間資金集めに励んだ結果が目に映っていた。完成した塀に風船をつける子どもたち、ペンキ塗りや看板作りをする業者さん、セレモニーに来てくれたたくさんの大人方、大勢の人々に祝福され、胸がいっぱいいっぱいになった。

この場に立てたことが本当に光栄に思えた。資金集めに協力してくれた方々、また、塀が完成するまでに携わってくださった全ての方々に感謝を申し上げたい。

【最後に】

日々のミーティングの中でも先輩方が口を揃えて大切だと言っていた”人とのつながり"を強く感じた2週間だった。

このプロジェクトが成功するまでに、私たちPlas+のメンバーだけでなく、本当に多くの方々に見守られていることに気が付けた。決して私たちだけでは完成させることができなかった。感謝の気持ちを忘れずに、これからも謙虚に日々活動していきたい。

小泉 栞莉

国際交流・国際協力専攻1年

カンボジアでの気持ちの変化

【はじめてのカンボジア】

私は、今回の渡航で初めてカンボジアに訪れた。今回の渡航は、Plas+として最長の３週間という長い期間カンボジアに滞在した。この３週間で私はプノンペン、シェムリアップ、トムオー村、ロン島と様々な土地を訪れたことにより、様々なカンボジアを知ることができた。

また、初日に警戒心でいっぱいの私がカンボジアに到着して何より驚いたことは、クメール語を使いカンボジア人とコミュニケーションをとっている先輩方の姿だった。

【トムオー村での活動】

今回の渡航で、トムオー村での1番の目的は先輩方が挑戦した塀建設プロジェクトの完成式を開催することだった。私は、Plas+に所属してからこの2月渡航までトムオー小学校に行ったことがない状態で、プロジェクトに携わっていた。

塀建設のための資金集めや渡航準備をする際、正直カンボジアの子どもたちのためというより、先輩方のプロジェクトが成功して欲しいという思いの方が強かった。しかし、今回トムオー小学校の子どもと実際に交流

し、塀の完成式に出席したことにより自分にとってのPlas+に対する気持ちやこのプロジェクトに対する考え方が大きく変化した。

また、先輩方が子どもたちのために強い意志を持ってこの大きなプロジェクトに挑戦した偉大さを実感することができた。私にとって、塀の完成式に出席できたことは今後の活動に繋がる大きな経験になった。

【現地での国際交流】

私は、くっくま孤児院で歌が大好きな1人の男の子に出会った。

モアナの主題歌を日本語で歌えるようになりたい男の子は、私が書いた日本語の歌詞を一生懸命読んでお別れするギリギリまでメロディーを覚えるため、何度も一緒に歌った。歌手になりたいという目標に向かって努力する1人の男の子に出会い、ひたむきに努力する姿勢を改めて学んだ。

【さいごに】

初めてのカンボジアでたくさんの人に出会い、今回Plas+に関わって下さった人や今まで先輩方が築きあげたカンボジア人との繋がりをこれからも大切にしていきたいと心から思った。

プノンペンの街を歩けば知り合いに会う、そんな人間関係を築ける先輩方を誇りに思う。また、全く面識もない外国人の私に対して、手を振ったら笑顔で振り返してくれるカンボジア人の優しさや温かさが大好きだ。この優しさのおかげかカンボジアで過ごす時間はいつもよりゆっくり流れているように感じた。そんな温かい人で溢れるカンボジアの魅力をたくさんの人に知って欲しい。

また今回、塀建設プロジェクトを成功させることができたのは、クラウドファンディングや街頭募金を通してたくさんの方々から温かいお言葉や

ご支援をいただけたおかげだ。見ず知らずの大学生に頑張れと声をかけてくれた街の方々やインターネットを通じて日本各地からご支援してくださったたくさんの人と繋がることができた。この経験から人と繋がり協力することの素晴らしさを実感した。

加えて、協力してくださった皆様に心からお礼を申し上げたい。この気持ちを忘れずに、今後の活動に励んでいきたい。

佐藤 透

国際交流・国際協力専攻1年

初めてのカンボジア渡航を終えて

【はじめに】

大学1年の4月末、Plas+に入った当初、僕は9カ月後のカンボジア渡航の事など想像することも出来ず、プロジェクト達成を目指す先輩たちの後をただただ付いて行く事しか出来なかった。

しかし、2月渡航では準備段階から1年生も主体的にプロジェクトに関わる機会が増え、実際にカンボジアで活動を行う実感がわき、渡航に対して全力を注ぐことが出来た。これも今まで、街頭募金や高校での授業、クラウドファンディングなどPlas+の様々な経験を通したからこそ出来た事だと思う。

佐藤透

　このような機会を与えてくれた先輩方、またここまで一緒に活動してきた同期に感謝したい。

【活動・学び】

　3週間のカンボジア生活の中で、僕が一番感動したのはカンボジアの人々の温かさだ。この点に関しては首都のプノンペンでも田舎にあるトムオー村でも共通していた事でカンボジアの人々は僕たちのことを温かく迎えてくれた。

　レストランの店員と世間話をする時でも村の子ども達と遊ぶ時でもクメール語と日本語でお互いの言語がほとんど分からない状態にあり、会話をするのにとても苦労した。しかし、お互いに身振り手振りや片言の英語を使って自分の意見を伝えようとしたり、相手の言いたいことを何とか汲み取ろうとする姿勢を見せることでコミュニケーションを取ることが出来た。カンボジアでのこれらの経験は僕にグローバリゼーションとは何かを気づかせてくれたものであり、また自分の中で大きく成長できた体験だ。

　また子どもが笑顔で遊んでいる姿や運動会を全力で楽しんでいる姿を見て、この子達のためにこれからもトムオー小学校と関わり続けていきたいと思った。今回の渡航を経て、僕はPlas+の掲げる「present love」を身をもって感じた。そしてこの気持ちをこれからも大切にしていきたい。

【最後に】

　今回の渡航は1年生にとって最初の渡航であり、4年生と行く最後の渡航になった。先輩たちと３週間過ごして、先輩たちの人柄やPlas+のことをより深く知ることが出来た。

　僕たちはこれから後輩を持つ立場として、先輩たちが作り上げたこの

Plas+を伝えていかなければならない。僕は今回の渡航の先輩たちとの思い出をずっと忘れずにこれからもPlas+として活動していきたい。

最後になりましたが今回の塀建設プロジェクトにご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。今回の成功は皆様のご協力あってこその結果であり、トム・オー村にて完成した塀を見た際、「この塀は多くの人々の気持ちで建ったのだ」と、とても感動した事は今でも心に残っています。

これからも皆様からのご厚意を糧に邁進してまいりますので、Plas+の事を応援して頂けたら幸いです。本当にありがとうございました。

高橋 くるみ

国際交流・国際協力専攻1年

初めてのカンボジア渡航を経て

【はじめに】

今回の初めての3週間に渡るカンボジア渡航では、首都のプノンペン、シェムリアップ、そしてトムオー村、どれも違ったカンボジアを自分の目で見ることができた。3週間の渡航では、日本では当たり前でないものや見られないもの、ショックを受けるようなことも沢山見ることがあった。

それらを見た経験は自分が当り前のようにおくれている生活、大学に通うことができている生活、これらが当たり前ではないこと。そして決して

高橋くるみ

無駄なものにしてはいけないということ、自分のことについて改めて考えさせてくれた。

【活動・学び】

私たちはついにトムオー小学校につくことができた。子どもたちは私たちを走って迎えに来てくれた。そして二番目に見えたのが小学校の四方を囲う塀。駅前で募金活動、ネット上でのクラウドファンディング、見ず知らずの大学生の私たちに温かい言葉、そして資金集めに協力して下さった方、先生全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

塀の中、校舎で遊んでいる子どもたちを見て、塀ができたことは子どもたちの安全が守れた事のほか、仲間意識や学校への愛着なんかも生まれたのかなと私は思った。トムオー小学校では三日間に渡り、運動会、塀の完成式そして出前授業を行った。私は、言葉が通じないことで子どもたちとコミュニケーションが取れるかすごく不安だったが、覚えたクメール語と身振り笑顔で子どもたちと仲良くなることができた。自由時間に日本語を一生懸命覚えようと来てくれる子もいた。すごく楽しく幸せで、もっとここにいたい、もっとクメール語を話せるようになりたいと思った。

【最後に】

田舎であるトムオー村の小学校に、私たち日本人の大学生がいくことで、子供たちに少しでもスペシャルで楽しい時間を一緒に共有することができていたら嬉しいな、そしてそれをこれからも、大好きなPlas+の仲間と続けていきたい、と思えるような初めてのカンボジア渡航になった。

田村 遥花

国際交流・国際協力専攻1年

はじめてのカンボジア渡航

【はじめに】

今年の2月、やっと念願のカンボジアに行くことができた。私にとっては初めての海外だった。カンボジアは私のイメージとかけ離れていて、車の多さや立ち並ぶビル、煌びやかな街に驚きが隠せなかった。この3週間とてもたくさんのことがあったけれど、とても充実した3週間だったと思う。

【活動と学び】

1年間、Plas+として色々な活動をしてきたが、私は実際に子どもたちに会ったことも、実際に学校を見たことも、カンボジア人に会ったこともなかった。そんな状態だったので、「子どもたちは本当に喜んでくれるのだろうか」、「業者さんは信用できるのだろうか」など、不安があった。けれど、実際にカンボジアに行って、子どもたちに出会って、塀を見たとき、「あぁ、やってよかったなあ」と心から感じた。

塀完成セレモニーのために門や塀のレンガをみんなで一緒にペンキで塗ったりしたこともあり、式のときはみんなで作りあげたことを強く感じた。また塀の向こう側に子どもたちが並んでお迎えしていた姿を見たときは涙が溢れそうになった。トム・オーの子どもたちは初めて会う私にもと

田村遥花

ても懐いてくれて、名前も覚えてくれて、一緒に遊んでくれた。

私が話せるクメール語はほんの少しで、子どもたちと意思疎通を図ることはなかなかできなかった。でも、言葉が分からくてもこっちが笑顔でいたら子どもたちも笑顔を返してくれた。あまり話せてなかったけど、心は通じ合えたような気がして、「笑顔ってすごいな」と思った。会ったばかりの私に「次いつくるの？」って聞いてくれたとき、話せないがために答えることができなくてもどかしかった。次回の渡航までにはもっと話せるようにクメール語の勉強に励みたい。

今回、私たちが子どもたちと遊び、村での活動を滞りなく進められたのは、協力してくれたソクさん、ソパートさん、アチョーさん、チャンさんを始めとする多くのカンボジア人のおかげである。自分たちの時間を割いて、暑い中一生懸命協力してくれたみんなには感謝してもしきれない。

村での滞在後、カンボジアをより深く知るためにアンコールワット、ベンメリア遺跡、トンレサップ湖、トゥールスレン博物館、キリングフィールドなどに行った。トゥールスレンやキリングフィールドは特に衝撃が強かった。なんの罪もない人たちや子どもたちが殺されてしまった場所に実際に行って、この目で見ることはとても辛かったけど、インターネット上だけでは知ることはできなかったと思う。

【最後に】

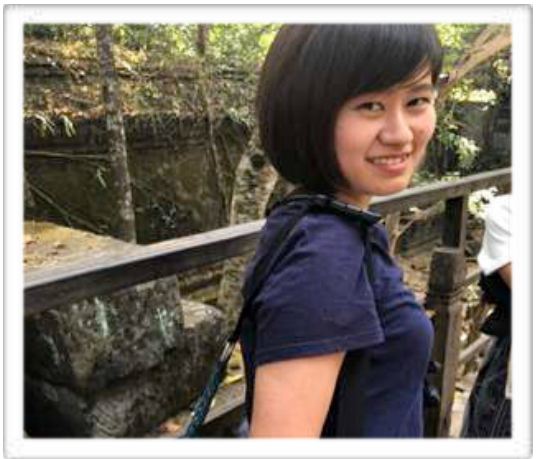
カンボジアで3週間過ごして、たくさんのカンボジア人と出会うことができた。私の拙いクメール語も一生懸命理解しようとしてくれたり、伝わったときはすごく喜んでくれたり、手を振ったら振り返してくれたり。カンボジアにはとてもとても暖かい人たちがたくさんいることを知ることができた。

しかし、このようにたくさんの貴重な経験をすることができたのも、今回のプロジェクトにご協力してくださった日本のたくさんの皆さまのおかげだと思っている。募金活動の際、こちらを気にしながらも通り過ぎ、その後わざわざ戻ってきて募金に協力してくださった方が多数いた。また、小さな子どもがご両親に頼んで募金をしてくれたりもした。「頑張ってね」と応援してくれた方も大勢いた。

このように、プロジェクトを通してカンボジア人だけではなく、日本の方々の温かさも痛感した。この場で改めてお礼を申し上げたい。ご協力、ご支援してくださった皆様、本当に本当にありがとうございました。

丸山 海結

国際交流・国際協力専攻1年



私のカンボジア初渡航

【はじめに】

私は今回の初めてのカンボジア渡航で、今までの自分にとって海外、カンボジアに対しての考え方がとても変わった。私は今までの先輩方の活動の中で掲げてきた”Present love to all students ~ 全ての子どもたちに愛を~という活動モットーに共感し、4月からPlas+に所属し、一緒に活動させていただいてきた。

丸山海結

今年度は団体設立メンバーである4年生の最後の年であり、私たちが今年度行なってきたトム・オー村、トム・オー小学校での塀建設プロジェクトは多くの緊張感があり、まだなにもわからなかった1年生にとっても様々な経験を多くさせていただくことができ、大きく成長できた一年だった。

【活動と学び】

私はPlas+に所属してからの1年間、団体設立メンバーの最後の大きなプロジェクトが進んでいて、Plas+にとって大事な1年であった。

そのことから、Plas+所属当初から緊張感が漂っていた。そして、私たち1年生もそのような大きなプロジェクトについても、わからないことも多かったが、先輩方の力になりたかった。Plas+の新メンバーとして先輩方の背中を必死に追った。この1年間の中で最も思い悩んだことは、11月に行った順天高校での出前授業だった。順天高校では大学生ができる国際協力とは何かを高校生たちに教えた。私はPlas+の活動紹介で今までの先輩方がトム・オー小学校で実際に何を行ってきたのか紹介したのだったが、その際、私はまだカンボジアへ行ったことがなかったことから、カンボジアについて考えることにとても悩んだ。募金活動においても、カンボジアについて深く考えることができなかった。

この一年はただただ先輩方からのお話を聞いたり、写真を見せていただいたりし、必死に先輩方の後を追っていた。先輩方の力になりたかった。

待ちに待った2018年2月7日、私は初めてカンボジアへ飛び立った。

カンボジアは今まで日本で想像していたこととは全く違った世界だった。私が今まで抱いていたカンボジアはやはり世間一般の人が思うような国だった。インターネットの通信環境もなく、町もそこまで発展していないという固定概念があった。しかしながら、カンボジアに到着すると、自

分が想像していたより町は発展していたように感じた。

村での生活は自分の中で今回の渡航の中で一番印象に残っている。私たちの拠点としている小学校に行ってみると、今回のプロジェクトによって完成された塀が堂々とあり、校舎からは私たちに駆け寄って来てくれる子どもたち。私はこの瞬間のこみ上げる嬉しい気持ちと今までの活動を思い出し、涙が溢れた。今でもあの時の感動は忘れられない。初めて子どもたちと交流をし、子どもたちはクメール語での会話のみだったため、私自身も理解が難しかった。このような経験は初めてだった。しかしながら、やはり言葉だけではなく、笑顔があればどこかで通じるのだと思った。

そして、メインイベントである塀の完成式では、村長さん、郡長さん、たくさんのカンボジアの方が来てくださった。みんなが笑顔だったことがとても印象的だった。村では夜、カウンターパートのソパートさんのアイディアで、校庭で子どもたちと映画鑑賞会が行なわれた。子どもたちの笑顔、喜んでいる顔はやはり忘れられない。

子どもたちとの別れはとても悲しいものだったが、来年も再来年もまたトム・オー小学校に行くことができると考えるとまたワクワクする。子どもたちの成長がとても楽しみだ。

【最後に】

今回、この塀建設のプロジェクトが終わりを迎えるわけだが、今後もこの塀のアフターケアについてもしっかりと考えて行くことと同時に、また現地と今の自分たちに見合った、可能な支援を行なっていきたい。

個人的には、日本の小学校にも訪問をし、様々な調査を行いたいと考えた。例えば、カンボジアの小学校について日本の子どもたちに知ってもらえるよう出前授業を行ったり、日本の小学校とカンボジアの子どもたちの

異なるところを実際に小学校へ訪問し、調査したいと思った。このことから、カンボジアの小学校、トム・オー村での調査もしっかりと行いたい。塀建設という大きなプロジェクトにお力を貸してくださった方々への感謝は忘れず、今後も力を入れて励んで行こうと思う。

この度はたくさんの方々からのご支援、暖かいお言葉、私たちにとっての大きな力になってくださったこと、全てにお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

渡部 陸

国際交流・国際協力専攻1年

初めてのカンボジア渡航を終えて

【はじめに】

初めてのカンボジアは見るもの全てが新鮮で今回の渡航に対し期待に心を躍らせていた。しかし、私は、カンボジアどころか海外に行くことが初めてであったため、現地に着いてから数日は、バイクタクシー、トゥクトゥクに乗って移動することだけで警戒するほど不安も抱えており、期待よりも不安の方が大きかった。

そのような、心境の中、3週間の渡航が始まった。

渡部陸

【活動と学び】

今回は先輩方が4年間かけて進めていったプロジェクトの集大成である渡航だった。拠点としているトム・オー小学校で過ごした3日間では運動会や交通安全についての劇、そして、日本で募金やクラウドファンディングを使い資金を集め建設した、塀完成セレモニーを行った。

3日間に共通することは、子どもたちの純粋な笑顔に、愛を届けに行った私たちが笑顔、元気をもらったことだ。また、完成式を行った日は、以前からプロジェクトにご協力してくださったカンボジア人のソパートさんをはじめとするカンボジアの方、募金などにご協力してくださった日本の方など、本当に沢山の方に支えられている事を実感し、今後のモチベーションに繋がった。この3日間は私にとって、非常に濃密な時間だった。

村での生活が終わるころにはすでに、子どもたちが恋しく別れ難かった。次回の渡航で会うのが今から待ち遠しく思う。

また、歴史を学べるトゥールスレン収容所博物館やキリングフィールド、ベンメリア遺跡、アンコールワットで歴史を学んだ。その他にも、トンレサップ湖や孤児院、日本語学校にも訪れ文化を感じた。今まで話で聞いていたことを実際に訪れることで、カンボジアについて改めて勉強できたと思う。

【最後に】

カンボジアで過ごした時間は、私にとって非常に有意義な時間だったと感じる。現地に着いてから不安を抱えていたが、堂々としている先輩方を見ていて、次第に和らいでいった。なので、来年みんなの緊張を解せるくらい堂々とできるようにしたい。また、支えてくださる方への感謝を忘れず精進し、さらに子どもたちを笑顔にできるよう活動していきたい。

PART 5 おわりに

最後に、Plas+の今後について触れ、この報告書を締めくくりたいと思います。

ここまでお付き合い頂き、本当に有り難うございました。

今後の課題

トム・オー小学校に新しい塀を建設したことにより、学校内へのバイクや耕運機の侵入はほぼなくなった。しかし、交通事故は学校内だけで起こるわけではない。校庭から１歩外へ出れば、リスクは存在している。

そこで私たちは、今回の渡航で、アームリフレクターを用いた出前授業を行った。期待できる効果としては、子どもたちが学校外でも交通事故に遭う可能性を減少させることであった。

このように塀建設は完了したが、『トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト』としてPlas+が取り組むべきことは、まだ残っていると考える。具体的には、塀のアフターケアが挙げられる。ただし、それは、Plas+がその塀を将来にわたって維持、修理していくことではない。もちろん、先生方と協力して、壊れないような工夫を行っていくが、ハード面での塀の管理はトム・オー小学校側の課題だといえる。そして、それを補うために、我々の行うこの「アフターケア」とは、**完成した塀を活用しての一層の啓発活動と、さらなるニーズの調査**といえるだろう。

ゆえに2018年度以降も、Plas+は、トム・オー小学校において、子どもの安全をより確かなものにするための試行錯誤を続けていく。既に、今回の渡航で、私たちは学内および学校周辺での追加調査を実施した。

その際、学校の子どもたちにとって、安全の妨げになりうる問題を発見した。私たちが今回調査した校庭の一部は、塀建設が始まる以前、雑草や木が生い茂ったまま、学校も放置していた場所である。それが、建設工事と並行して、邪魔になった雑草や木は伐採されることなった。その結果として、**校庭は元の2倍ほどの広さとなった**。トム・オー小学校は、そこをさ

今後の課題

らなる教育目的に活用することが可能になる。これは、プロジェクトのもたらした正の副次的効果だといえる。

しかし、その一方で、新たにできたそのスペースの其処此処には、早くも、**ゴミが散乱するようになってしまった。その中には、割れた瓶など、危険なものも転がっていた。**もちろん、私たちは、塀建設そのものが現地にとって害悪だったとは考えていない。よりフェアな視点で現状を見渡しても、塀がなかった状態で子ども達が晒されていた交通事故のリスクは、それよりもずっと深刻なものだったといえる。しかし、負の副作用が新たな問題として浮き上がってきたことは、確かである。

それでも、この校庭のゴミ問題について、私たちは、それを0にするとまではいかないまでも、大きく減らすことは可能だと信じている。そして、そのためには、これまで同様、トム・オー村の人々と信頼関係を続けていくことが不可欠である。

ゆえに、4年生が卒業した後の新生Plas+は、『トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト』の名を引き継いで、これから現地に携わっていく。

2018年度に入って、新たに9人の1年生がメンバーになりました。

おわりに

Plas+として7度目の渡航の今回は、4年生にとって最後の渡航であり、2年生にとって先輩になって初の渡航であり、1年生にとっては全てが初めてのカンボジア渡航でした。メンバーは各々違った心境で臨んでいたと思います。

2年前から本格的にPlas+のプロジェクトとして実施していた塀建設は、日本、カンボジア両国のたくさんの方々の温かい応援やご支援によって無事に建設を完了致しました。

トム・オー小学校の子どもたちが交通事故の危険と隣り合わせで学校に通っている状況を問題視した私たちは、現地の方々のニーズに応える形で塀建設を実施し始めました。

その資金を日本で募るために、学内募金、街頭募金、企業協賛、物品販売、クラウドファンディング、そしてメンバー内での募金など、あらゆる手段を駆使しました。これらの挑戦は、Plas+の結束をより強めたものとなり、またPlas+をたくさんの方が応援してくれていることに気付かされるものとなりました。

Plas+で始めたプロジェクトではありますが、ご協力してくださった方々がいなければ実現することは不可能だったと思います。

この場をお借りして、私たちの活動を応援し、ご協力して下さった皆さまに厚く御礼申し上げます。まだまだ未熟な私たちですが、これからもご指導と応援をどうぞよろしくお願い致します。私たちPlas＋は、周囲への感謝と、現地に愛をプレゼントする気持ちを忘れず、活動に励んでいきます。

2017年度　カンボジア 現地活動報告書

Plas+　(Present Love to All Students)

本文：市川舞夏、大久保佳織、大塚桃香、村瀬朱里、安部和佳奈

小川龍星、小田嶋優花、谷内うらら、岩上颯太、川畑美由紀

小泉栞莉、佐藤透、高橋くるみ、田村遥花、 丸山海結、渡部陸

表紙・デザイン：別府拓也

編集・発行責任者：内尾太一（麗澤大学外国語学部教員）

連絡先：tuchio@reitaku-u.ac.jp

印刷所：ちょ古っ都製本工房

発行日：2018年6月20日

Plas+ ホームページ：https://rtk-plas.jimdo.com/

Plas+ Twitter：@plas_reitaku